

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

経営体育成基盤整備事業 野井倉下段地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

わ だ うえ
和田上遺跡

2013年2月

鹿児島県志布志市教育委員会

序 文

本書は、平成 24 年度経営体育成基盤整備事業野井倉下段地区の事業実施に伴い、志布志市教育委員会が実施した、和田上遺跡の発掘調査報告書です。

和田上遺跡では狭い調査面積にもかかわらず、旧石器時代と縄文時代の遺物・遺構が見つかりました。

旧石器時代の成果として、宮崎平野部を中心にみられる特徴的な細石刃核が認められました。約 13,000 年よりも以前から、この地域が宮崎地方と関係があったことがうかがえました。

縄文時代の成果として、約 9,500~9,000 年前の土器や石器、そして集石や連穴土坑が見つかりました。石蒸し調理施設と考えられている集石や燻製調理施設と考えられている連穴土坑が見つかったことから、当時の人々がこの地を生活の場として利用していたことが分かりました。

本書が市民の皆様をはじめとする多くの市民に活用され、地域の歴史や文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご理解・ご協力いただいた地権者をはじめ、各関係機関及び発掘調査に従事・協力していただいた地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 25 年 2 月

志布志市教育委員会
教育長 坪田勝秀

例 言

- 1 本報告書は経営体育成基盤整備事業野井倉下段地区に伴う和田上遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は鹿児島県志布志市有明町野井倉字和田上に所在する。
- 3 発掘調査は鹿児島県農政部の依頼を受け、志布志市教育委員会が実施した。
- 4 発掘調査は平成24年6月18日から8月31日まで実施し、整理作業・報告書作成は平成24年8月1日から平成25年2月25日まで実施した。
- 5 本書で用いた方位は全て磁北であり、レベル値は鹿児島県農政部が提示した事業実施計画図面に基づく、海拔絶対高である。
- 6 遺物番号は通し番号とし、本文・表・挿図・図版の番号は一致する。
- 7 挿図の縮尺は各図面に示した。
- 8 遺跡位置図等の地図は国土地理院発行の1:25,000地形図『志布志』、1:50,000地形図『志布志』、大日本帝国陸地測量部発行の1:50,000地形図(明治35年測量)を利用した。
- 9 発掘調査における図面の作成及び写真撮影は相美伊久雄と坂元裕樹が行った。
- 10 遺構・遺物の実測・トレースは臨時職員の協力を得て、相美・坂元が行った。また、一部遺構図作成にデジタル技術を用いた。
- 11 石器の実測・トレースの一部は、株式会社九州文化財研究所に委託し、相美が監修した。
- 12 遺物の写真撮影は鹿児島県立埋蔵文化財センターにて、吉岡康弘氏が行った。
- 13 本書の執筆・編集について、第4章第2節及び第5章第2節の縄文時代土器に関する執筆を坂元が、その他の執筆及び編集を相美が行った。
- 14 出土遺物及び図面・写真的記録類は志布志市教育委員会で保管し、展示・活用する予定である。なお、遺物注記の略号は「WDU」である。
- 15 発掘調査及び報告書作成の際には、以下の方々よりご指導・ご助言を頂いた。ご芳名を記すことで、謝意を表します(敬称略)。
中村直子・寒川朋枝(鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)

凡 例

- 1 本文で用いた遺構記号は、文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき』(2010年刊行)に準拠し、以下のとおりである。なお、遺構番号は遺構の種類ごとに、それぞれ検出された順に通し番号を与え、報告書まで固定している。
- 2 土層と土器の色調は『新版標準土色帳』に準拠した。
- 3 土器の胎土観察には、实体顕微鏡を用いた。

SS: 集石 SK: 土坑

本文目次

序文	第3章 調査の方法
例言・凡例	第1節 発掘調査の方法 ······ 9
日次	第2節 履序 ······ 12
第1章 調査の経過	第4章 調査の成果
第1節 調査に至るまでの経過 ······ 1	第1節 旧石器時代の調査 ······ 15
第2節 調査体制 ······ 1	第2節 繩文時代の調査 ······ 15
第3節 試掘調査 ······ 1	観察表 ······ 26
第4節 本調査 ······ 2	第5章 総括
第5節 整理・報告書作成作業 ······ 3	第1節 旧石器時代 ······ 27
第2章 遺跡の位置と環境	第2節 繩文時代 ······ 27
第1節 地理的環境 ······ 4	第3節 補遺 ······ 28
第2節 歴史的環境 ······ 4	写真図版 ······ 31
	報告書抄録

挿図・表目次

第1図 遺跡位置図 (1:50,000) ······ 3	第1表 周辺遺跡地名表 ······ 6
第2図 周辺遺跡図 (1:25,000) ······ 7	第2表 旧石器時代石器観察表 ······ 26
第3図 周辺境界の変遷 (1:50,000) ······ 8	第3表 繩文時代早期土器観察表 ······ 26
第4図 調査区位置図 (1:1,500) ······ 10	第4表 繩文時代早期石器観察表 ······ 26
第5図 遺構配置図・遺物分布図 ······ 11	第5表 繩文時代早期石器組成及び石材組成 ······ 29
第6図 土層柱状図 ······ 12	
第7図 土層断面図 (1) ······ 13	
第8図 土層断面図 (2) ······ 14	
第9図 旧石器時代遺物 ······ 16	
第10図 集石1号実測図・集石構成累積量グラフ ······ 17	
第11図 集石2号・土坑1号・連穴土坑1号実測図 ······ 18	
第12図 遺構内出土遺物 ······ 19	
第13図 繩文時代早期土器分布図 ······ 20	
第14図 繩文時代早期土器 ······ 21	
第15図 繩文時代早期石器分布図 (器種別) ······ 22	
第16図 繩文時代早期石器分布図 (石材別) ······ 23	
第17図 繩文時代早期石器 (1) ······ 24	
第18図 繩文時代早期石器 (2) ······ 25	
第19図 市内出土細石刃核・井手上A遺跡埋設上器 ······ 30	

写真図版目次

図版1	31	図版3	33
空中写真（国土地理院 1970年撮影）		集石2号検出状況（西から）	
遺跡遠景（岳野山から）		十坑1号検出状況（南から）	
遺跡近景（南から）		土坑1号半截状況（東から）	
遺跡近景（西から）		連穴土坑1号検出状況（東から）	
作業風景（北から）		連穴土坑1号半截後検出状況（北から）	
図版2	32	連穴土坑1号埋土断面（東から）	
北壁上層断面		連穴土坑1号埋土断面（南から）	
東壁土層断面（E-1区付近）		図版4	34
前平式土器（№8）出土状況（北から）		連穴土坑1号完掘状況（北から）	
縄文時代早期石器（№21）出土状況（西から）		連穴土坑1号前平式土器（№6）出土状況（北東から）	
集石1号検出状況（西から）		連穴土坑1号完掘状況（南から）	
集石1号掘り込み検出状況（南西から）		連穴土坑1号完掘状況（南から）	
集石1号掘り込み埋土断面（北東から）		連穴土坑1号断ち割り状況（北東から）	
集石1号掘り込み完掘状況（北西から）		図版5 旧石器時代石器及び縄文時代早期石器	35
		図版6 縄文時代早期土器	36

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

志布志市教育委員会（以下、市教委）は、文化財の保護・活用を図るために、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

平成18年度、県農政部農地整備課（大隅地域振興局農林水産部、以下、県農政課）は志布志市有明町野井倉下段地区において、平成20年度新規事業として経営体育成基盤整備事業を計画し、事業対象地における埋蔵文化財包蔵地の有無についての照会を県教育委員会文化財課（以下、県教委）に行った。

これを受けて、県教委・県立埋蔵文化財センター・市教委が平成19年3月に分布調査を実施した。その結果、事業対象地に和田上遺跡のほか4遺跡存在することが判明した。

この分布調査を受けて、県農政課・県教委・市教委は埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行った。その結果、事業着手前に確認調査を実施することとなり、市教委が平成20年8月18日～11月7日に行った。

和田上遺跡では5ヶ所設定したトレンチのうち、3ヶ所のトレンチ（1～3T）から遺物が認められ、事業対象地の一部に旧石器時代と縄文時代早期の遺物包含層が存在することが判明した。

この結果を受けて、和田上遺跡の取扱いについて県農政課・県教委・市教委で協議を行った結果、遺構・遺物が認められた箇所については、施工高等の設計変更により埋蔵文化財の保護が図られることとなった。

以上の経緯については市埋蔵文化財発掘調査報告書（5）を参照された。また和田上遺跡以外については同報告書（5）・（6）を参照されたい。

平成23年度、和田上遺跡付近のほ場整備工事の着手を予定した県農政部は県教委へ、文化財保護法第94条第1項に基づく「周知の埋蔵文化財包蔵地における上木工事等について」の「通知」を行った（平成23年6月17日付）。これを受けて、県教委から県農政課へ、工事立会を実施する旨の「通知」がなされた（平成23年7月19日付）。

平成23年12月より、工事の進捗に合わせて排水路の掘削やほ場整備対象地の表土剥ぎ取りなど立会を行った。

平成24年1月に行なった工事立会の際、ほ場基盤高までの掘削を実施したもの、一部が遺物包含層の保護層となるアカホヤ火山層を掘削する状態にあった。さらに、その西側の整備対象地は基盤高が低く、遺物包含層に影響を及ぼすことが判明した。そこで、埋蔵文化財の保護が図れるように、現地にて県農政部と協議を行ったものの、設計変更是難しいとのことであった。

そこで、埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を行った。その結果、縄文時代早期の遺物が認められたため、遺物包含層に影響を及ぼす箇所については記録保存を目的とする発掘調査が必要となった。

その後の協議の結果、本調査を平成24年度に実施することが決定し、県農政課と志布志市との間で業務委託契約が締結された（平成24年5月30日付）。

第2節 調査体制

1 平成23年度（試掘調査）

事業主体	鹿児島県農政部 (大隅地域振興局農林水産部)
調査主体	志布志市教育委員会
調査責任者	志布志市教育委員会
教育長	坪田 勝秀
調査事務局	生涯学習課長 米元 史郎 文化財管理室長 竹田 孝志 兼指定文化財係長 上田 義明 埋蔵文化財係長 大庭 祥晃 主任主査 相美伊久雄 主査 出口順一朗
調査担当	主任主査
2 平成24年度（本調査及び整理・報告書作成業）	
事業主体	鹿児島県農政部 (大隅地域振興局農林水産部)
調査主体	志布志市教育委員会
調査責任者	志布志市教育委員会
教育長	坪田 勝秀
調査事務局	生涯学習課長 柳山 弘昭 文化財管理室長 竹田 孝志 埋蔵文化財係長 上田 義明 主任主査 大庭 祥晃 主任主査 相美伊久雄 埋蔵文化財調査員 坂元 裕樹 臨時職員 齋原 類子 山元 弓枝
調査担当	主任主査

第3節 試掘調査

試掘調査は平成24年1月16日に実施した（作業員実動1日・作業員数3人）。調査は対象地に4×2mのトレンチを1ヶ所設定し、重機及び人力で掘り下げを行った。

その結果、アカホヤ火山灰層（IX層）下位のXc層より縄文時代早期土器の底部片1点と焼繕1点が出土した。

第4章 本調査

当初、市教委は平成24年5～7月までの3ヶ月の調査期間を予定していた。ところが、県農政課から予算の都合上5月の事業開始は難しいとのことであった。さらに、耕作予定者が10月からの作付予定を希望しているとのことで、発掘調査は8月までに終了させなければならない状況になった。

その後の協議の結果、平成24年5月30日に業務委託契約が締結され、6月からの事業開始が可能となった。しかし、調査開始のための事前準備等もあり、当初予定の3ヶ月という調査期間の確保は困難となった。そのため、作業員を増員して1日当たりの人力掘削作業量を増やすことにした。また、調査期間をできるだけ確保するためには、コンテナハウス設置前に調査を開始することにした。その結果、表土剥ぎ取りを重機貨物貸借契約以前に行うこととなり、その費用は市費で対応した。

平成24年5月3日～6月29日において、物品貸借の入札・契約、事務所設置用地の貸借契約、外業作業員の雇用手続き、レベル移動など、調査開始のための準備を実施した。

発掘調査は平成24年6月18日～8月31日（作業員実動26日）に実施した。延べ作業員人数は422名、調査範囲は376m²である。

事前の確認調査や試掘調査の結果から、IX層上位層には埋蔵文化財が存在しないことが分かっていたため、表土からIX層下部までは重機（バックホー）で剥ぎ取りを行った。なお、その際にはまずIX層上面において遺構精査を行い、遺構が検出されないことを確認した上で、IX層下部まで剥ぎ取っている。

調査開始当初、IX層下部～Xa層は人力で掘り下げていた。しかし、Xa層からの遺物が認められないことから、Xa層は無遺物層と判断し、期間途中からはXa層上部まで重機で掘り下げた。それ以下は人力により、薩摩火山灰層（XⅠ層）上面まで掘り下げた。

確認調査の結果から、XⅠ層下位には旧石器時代遺物包含層が存在するものの、XⅠ層が保護層となり、その保護層が確実に確保され、埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れがないと判断された。したがって、調査はXⅠ層上面まで終了している。

東壁際の南北2ヶ所に土層観察も兼ねて、3.0×1.5mと2.5×1.5mの下層確認トレレンチを設定し、XIV層上面まで掘り下げた。確認調査では、XⅡ・XⅢ層から旧石器時代細石刃文化期の遺物が出土しているが、今回の調査では認められなかった。

掘り下げや面図作成が終了した調査区北側より徐々に埋戻しを開始し、8月30・31日に最終的な埋戻しを行つて、事業者側に現場の引き渡しを行つた。

なお、調査期間中は蒸し暑く、さらに土がかなり硬質

なため、掘り下げ作業が相当な重労働となつたため、寒冷紗を用いたり、こまめに休息をとる等、健康管理に注意を払つた。また、調査期間が梅雨時期と重なつたことや数度の台風接近もあり、調査日数の確保に苦労した。さらに、調査区は水はけが悪く、大雨により調査区が冠水することもあり、水中ポンプを利用するなどの排水対策も行った。なお、駐車場予定地も水はけが悪かつたため、車両は農道駐車することとなった。

発掘作業終了後、文化財保護法第108条及び遺失物法第4条第1項に基づいて、「埋蔵物発見届」（平成24年9月4日付）を志布志警察署長へ、「発掘調査実施報告書」「埋蔵文化財保管証」（平成24年9月4日付）を県教委に提出するなど、発掘調査に係る諸手続きを実施した。

また、県農政部から県教委へ、文化財保護法第94条第1項に基づく「周知の埋蔵文化財保管地における土工事業等について」の「通知」がなされた（平成24年9月3日付）。これを受けて県教委から県農政部へ、慎重に工事を行う旨の「通知」がなされた（平成24年9月24日付）。これを受けて、平成24年10月には場整備工事が行われた。

発掘調査の具体的経過は、日記抄を週毎に集約して記載する。

（6月18～21日） 調査区設定・重機による表土剥ぎ・IX層上面遺構精査（18日） IX層剥ぎ取り・調査事務所設置予定箇所の整地（20日）。

（6月26～29日） 調査器材搬入、環境整備、IX層下部～Xc層掘り下げ。

（7月2～6日） コンテナハウス設置、ベルトコンベア・重機搬入（2・3日）、グリッド設定（4日）、A・B・1区Xc・Xe層掘り下げ、遺物取上（1～20）。

（7月9～13日） A・B・1・2区IXb～Xc層掘り下げ。11～13日雨天中止。

（7月17～20日） 雨天等により、作業中止。

（7月23～27日） A～C～1・2区Xc・Xe層掘り下げ。重機によるIXb～Xa層上面剥ぎ取り（B-1・2区南半から）、A・B・1・2区XⅠ層上面遺構精査・センター図作成、北壁・東壁一部土層断面実測、遺物取上（21～30）。

（7月30日～8月3日） B～D～1・2区Xc・Xe層掘り下げ、B-1・2区XⅠ層上面遺構精査・センター図作成、集石1検出、遺物取上（31～63）。1・2日台風接近のため中止。

（8月6～10日） D・E-1・2区Xc・Xe層掘り下げ、C-1・2区XⅠ層上面遺構精査、北側下層確認トレレンチ掘り下げ、集石1実測、集石2検出、遺物取上（64～135）。環境整備（10日）、A-1・2区から埋戻し開始（7日～）。

（8月13～17日） D・E-1・2区Xc・Xe層掘り下げ、集石1・2実測、遺物取上（136～159）。

(8月20~24日) D・E-1・2区Xc・Xe層掘り下げ、東壁上層断面尖測、集石1・2尖測、21日雨天中止、遺物取上(160~183)、南側下層確認トレンチ掘り下げ。

(8月27~31日) 27・28日台風接近のため中止。C-E-1・2区遺構精査・センター図作成、土坑1・3穴土坑検出・掘り下げ・実測。調査器材撤収(29日)、調査区埋戻し・コンテナハウス・重機等撤収(30・31日)。

第5節 整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業について、一部(遺物洗浄・注記)を発掘作業と並行して調査事務所で開始した。

発掘作業終了後、有明文化財作業室にて本格的な整理・報告書作成作業に入り、平成24年12月にかけて、選

別、接合、実測・トレース、遺構製図、写真撮影、原稿執筆、編集などを行い、1月7日の印刷製本に係る契約後、本書の刊行をもって、全ての業務を終了した。

以下、具体的経過を毎月記す。

(6月) 洗浄、注記。

(9月) 分類・選別、台帳登録、図面整理、土器・集石疊合、石器実測等委託準備。

(10・11月) 石器実測・トレース、報告書掲載遺物抽出、土器実測・拓本、遺構製図、原稿執筆。

(12月) 遺物・遺構トレース、レイアウト、原稿執筆、編集。

(1・2月) 契約、校正、遺物収納。



第1図 遺跡位置図 (1:50,000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

志布志市は鹿児島県の最東部に位置し、宮崎県都城市及び串間市と県境をなす。北は曾於市、南西は大崎町と接し、南は太平洋に向かって開けた志布志湾に面する。

本市の地形は東から志布志湾に向かって緩やかに傾斜し、海岸近くで急崖となり、わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は、西側に旧朝砂丘・新潮砂丘に二分される砂丘海岸が続くに対し、東側は日南層群で構成される沿岸高台となる。市の北東部には御在所岳(530.4m)・笠岳(444.2m)・陣岳(349.3m)など、日南層群が構成する急峻な山岳地帯がある。

その西側には入戸火碎流が広く分布し、いわゆるシラス台地を形成し、志布志市の主体をなす。「原(ばる)」と呼ばれる比較的平坦な台地であるシラス台地は、南流する前川・安楽川・菱田川など大小の河川の浸食作用による深い浸食谷(「造(さこ)」)により細かく刻まれ、大小の狭長な台地となっている。

また、このシラス台地からは、北部の霧岳(408.3m)や中央部の岳野山(274.3m)、西部の宇都丘(179.1m)・草野丘(268.4m)など、市北東部同様の日南層群が構成する山岳・丘陵が突き出ている。

前述の三河川の流域には高位・中位・低位の三段の段丘が認められる。段丘崖下からの自然湧水によって低・中位段丘では集落が形成してきた。一方、高位段丘では地下水位が深いため集落形成が困難であり、「蓬原開田」や「野井倉開田」などのように近～現代に開かれるまでは、畠地として利用されるにとどまっていた。

この地域の地質は古いほうから、日南層群～阿多島浜火碎流～夏井層～阿多(夏井)火碎流～一期ローム層～入戸火碎流～新潮火山灰層となる。日南層群は主に頁岩・砂岩の細互層からなり、年代は漸新世～前期中新世とされている。阿多島浜火碎流は夏井海岸の一部に認められるもので、23～25万年前とされる。夏井層は下部の貝や植物の化石を含むシルト層と上部の礫層からなる。阿多(夏井)火碎流は黒色を呈する溶結度の低い均質な凝灰岩で、年代は28.5～10.5万年前とされる。入戸火碎流は海岸に沿った地域では海拔40m程のシラス台地を形成する。下部には大漂砾下軽石層が存在する。

和田上遺跡は菱田川河口から約5km上流東岸の河岸段丘上に位置する。この段丘は、菱田川と安楽川に挟まれたいわゆる「野井倉原(のいくらばる)」の西側末端部に約20mの高差で一段低くなっている中位段丘である。この中位段丘は長さ約1.3km、幅約700mで、南北に細長く広がり、上面はほぼ平坦で標高約50mを測る。本遺跡はこの段丘の南端に位置する。

第2節 歴史的環境

和田上遺跡は平成11年(1999)度に実施された農政分布調査で発見された遺跡で、弥生土器や土師器が採集されている。

本遺跡が所在する志布志市には現在約500ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が認められている。戦前には大正5(1916)年に志布志町六月坂横穴墓について報告を行った瀬之口伝九郎氏や昭和19(1944)年に志布志町出口A遺跡採集の獨鉛石を紹介した梅原末治氏の調査研究がある。戦後は、故河口貞徳氏・故原田昭子代氏・上村俊雄氏・酒匂義明氏等の発掘調査・研究に加え、故海老原行秀氏・故瀬戸口望氏という志布志町在住の研究者による熱心な調査・研究が行われており、学史上重要な遺跡が多い。

近年では主に有明町において農道整備に伴う発掘調査が行われ、弥生・古墳時代の様相が明らかになりつつある。また、地域高規格道路に伴う大规模な発掘調査により、質量ともに充実した資料が新たに追加されている。

なお、本市は現在の行政区分では鹿児島県に属するが、過去は日向国に属しており、明治4(1871)年の廢藩置県後も一時期、都城県や宮崎県に属した歴史もある。したがって、この地域の歴史・文化を考える上で薩摩・大隅だけでなく、日向地域の影響も考慮する必要がある。

旧石器時代

剥片尖頭器・角錐状石器等が出土した志布志町中領B遺跡・松山町藤野B遺跡・縄石器が出土した志布志町道重遺跡・有明町和田上遺跡などがあるものの、調査事例は少ない。

縄文時代

志布志町では故瀬戸口氏等の調査によって、「瀬戸銀座」と呼ばれるほど多数の遺跡が見つかっている。

草創期 文史上重要な志布志町東黒土田遺跡がある。隆起文土器や舟形配石灰炉・貯藏穴が見つかっている。特に貯藏穴から出土した吸菓類は日本最古である。同町鎌石橋遺跡でも隆起文土器が出土している。

早期 前半期の竪穴建物や集石・連穴土坑が多数見つかった志布志町倉園B遺跡・塞ノ神八式壺形土器等の良好な資料が出土した同町夏井土光B遺跡・連穴土坑の断ち割り調査を行い、「シミ状痕跡」を初めて検出した有明町下堀遺跡・耳栓が出土した志布志町船荷上遺跡・有明町横堀遺跡など、遺跡数が多い。

本遺跡のように集石と連穴土坑が見つかった遺跡としては、志布志町船荷上遺跡や有明町下堀遺跡・横堀遺跡がある。このほか、竪穴建物が志布志町夏井土光遺跡・弓場ケ尾遺跡で見つかっている。

前期 曾畠式が出土した志布志町別府石羅遺跡・野久

尾遺跡、有明町本村遺跡等があるが、調査事例は少ない。

中期 この時期も調査事例は少ないものの、春日式期の堅穴建物が見つかった松山町前谷遺跡、野久尾式や深浦式・船元式が出土した志布志町野久尾遺跡など重要な遺跡がある。

後期 志布志町の中原遺跡と片野洞穴有名である。中原遺跡では在地系の宮之追式・指宿式と瀬戸内系の中津式・福田K II式・宿毛式の良好な資料が多数出土している。片野洞穴では西平式→御領式期の動物骨や貝殻、釣針やかんざし等の骨角器が出土している。

志布志町福高遺跡では中岳II式の埋設土器が見つかっている。完形に復元できるものも出土しており、これまで全形が分かれる資料がなかった中岳II式において重要な資料が加わった。このほか、後期のほぼ全ての型式が出土した志布志町家野遺跡、独鉛石が見つかった出IIA遺跡がある。

晚期 和田上遺跡から約1.2km北に位置する井手上A遺跡や有明町上苑遺跡では入佐式深鉢の埋設土器が見つかっている。特に、井手上A遺跡資料は横位状態のもので類例が少なく、注目される。

志布志町小迫遺跡では黒川式干河原段階の良好な資料が認められており、クズの葉と推定される木葉痕をもつ組織痕土器が出土している。

第四時代

縄文時代に比べると調査事例は少ないものの、重要な遺跡が松山町に存在する。それは京ノ峯遺跡で、中期後半の円形・方形周溝墓が見つかっており、近畿・瀬戸内地方の影響が考えられている。志布志町福高遺跡では中期前~中葉の入来I・II式期の土坑墓が見つかっている。また、この遺跡では刻目突巻文土器の良好な資料が認められている。刻目突巻文土器が主体を占める遺跡は大隅半島では稀であり、注目される。

井手上A遺跡では中期中葉の入来II式期の堅穴建物が見つかっている。中期後半の山ノ口II式期になると堅穴建物の検出例は増加し志布志町柳遺跡、有明町長田遺跡・本村遺跡、松山町井手間遺跡・前谷B遺跡がある。井手上A遺跡では後期中~後葉の高付式に位置づけられる壺・壺・鉢の一括資料も見つかっている。

このほか、夏井土光遺跡では柱状片刃石斧が出土している。また、県内で唯一の発見例である中広鋼鉢が有明町土橋遺跡で見つかっている。

古墳時代

集落遺跡は有明町において調査事例が多い。仕明遺跡では中津野~東原式期の、屋部当遺跡では让堂原~佐賀式期の、長田遺跡では笠貫式期の堅穴建物が見つかっている。志布志町でも福高遺跡で笠貫式期の堅穴建物が見つかっている。

市内では笠貫式新段階資料の出土例が多く、志布志町

宮脇遺跡・安良遺跡、有明町上苑A遺跡・中牟田遺跡がある。「謎の7世紀」と呼ばれている時期の南九州の様相を明らかにする上で、注目される地域である。

古墳は前方後円墳である志布志町飯盛山古墳・小牧1号墳、直径40m以上で県内最大の円墳と言わわれている有明町原田古墳があるものの、発掘調査は行われていない。最近、原田古墳の測量調査が行われ、中期の「造り出し付き円墳」の可能性が指摘されている。

高塚古墳以外には有明町原田地下式横穴墓・馬場地下式横穴墓群、松山町京ノ峯地下式横穴墓群がある。蓬田川を挟んで本遺跡の対岸にある蓬原台地に位置する馬場地下式横穴墓群では、今まで6基確認されている。

市内には県内において2例しか認められていない横穴墓が存在していた。それは六月坂横穴墓であり、明治42(1909)年に旧制志布志中学校敷地内に発見されたもので、7世紀代の須恵器や土師器が見つかっている。

古代

志布志町水ヶ迫横穴墓で須恵器の藏骨器が見つかっている。墨書上器が志布志町小迫遺跡・安良遺跡、松山町牧ノ原A遺跡、有明町井手上A遺跡で出土している。このほかは、注目される調査事例はない。

中世

国指定史跡である志布志城跡が有名である。志布志城とは、内城・松尾城・高城・新城の四城の総称である。

志布志城は文治5(1189)年頃の教仁院氏の居城に始まって以来、楨井氏・畠山氏・肝付氏・島津氏など数々の領主に移り変わっており、中世の約400年間に武士興亡の歴史が繰り広げられた場所であった。保存整備目的で継続的に調査が行われており、華南三彩など中世後期の中國陶磁器や東南アジア陶器が出土している。

市内にはこの他、建久(1190~1198)年間に地頭弁済使安楽平九郎為成の居城とされる志布志町安楽城跡、文治4(1188)年に平重頼によって築かれたとされる松山城跡、南北朝期(1359年)に教仁院氏の居城とされる有明町蓬原城跡などが存在する。

中世山城以外の調査事例では、志布志町安良遺跡が注目できる。この遺跡では中世前期の備前焼・常滑焼等の中国陶器や白磁・龍泉窯系青磁等の輸入陶磁器が見つかっている。安良遺跡から約1km北に位置する安楽城跡や明治26(1893)年に境内から青白磁四耳壺の藏骨器や鏡・太刀・青白磁合子などが見つかっている安楽山宮神社を含めて、その歴史的背景が注目されている。このほか、有明町長田遺跡・仕明遺跡で中世墓が見つかっている。長田遺跡例は玉縁口縁の白磁碗が副葬されている。

この地域は中世において日向国諸県郡教仁院・教仁卿とされた。また志布志の名が史料で確かめられるのは、正和5(1316)年のことで、「日向方島津御志布志津大沢水宝満寺敷地…」(『沙弥蓮正打渡状案』)とあり、万

寿3(1026)年平季基が開いた島津庄・日向諸県郡一帯の港であったと考えられている。

近世

日向國諸郡志布志郷とされ、東を秋月藩と接するところから陸海ともにきわめて重要な郷であった。現在の志布志小学校に地頭仮屋がおかれて、その周辺には武家屋敷が建ち並ぶ「麗」を形成していた。藩米等の集積・積出港であった前川河口には津口番所が置かれていた。藩政末期には琉球を通しての密貿易が行われ、その商人であった中山宗五郎の屋敷は密貿易屋敷と呼ばれていた。これら地頭仮屋跡・津口番所跡・密貿易屋敷跡は発掘調査が行われ、陶磁器類が出土している。

志布志市の海岸沿いでは砂鉄が採集でき、それを用いた製鉄が行われていた。前川や安楽川上流の山麓を中心に、近世～近代の製鉄遺跡が数多く存在している。そのうち、市指定史跡である志布志町東谷製鉄遺跡では炭窯や石垣遺構、排溝渠が見つかっている。

井手上へ遺跡では道跡と考えられている溝状遺構が見つかっており、埋土中に櫻島の安永噴火(1779～82年)起源と考えられる火山灰が堆積したものもある。この遺跡周辺には近世の「志布志街道」の存在が推定されており、その関係が指摘できる。

第1表 周辺遺跡地名表

遺跡番号 (田番号)	遺跡名	所在地	目 標 地 形	国 文 化 史 的 的 的 性	古 代 的 的 的 性	中 古 的 的 的 性	近 代 的 的 的 性
1 18-211 (69-134)	二重塚A	志布志町安佐南二丁目塚原	○	-	-	-	-
2 15-254 (69-180)	久々花A	志布志町安佐南二丁目久々花	○	-	-	-	-
3 15-298 (-)	久々花B	志布志町安佐南二丁目久々花	○	○	○	-	-
4 15-312 (69-12)	西古	志布志町井手平字西古	○	○	-	○	-
5 15-320 (69-19)	平池A	志布志町井手平字平池	○	○	-	○	-
6 15-321 (69-24)	平池B	志布志町井手平字平池	○	○	-	○	-
7 15-336 (69-35)	平尾B	志布志町井手平字平尾	○	○	-	○	-
8 15-341 (69-40)	平尾	志布志町井手平字平尾	○	○	-	○	-
9 15-348 (69-47)	駒場	志布志町井手平字駒場	○	○	-	○	-
10 15-350 (69-55)	大瀬A	志布志町井手平字大瀬	○	○	○	-	-
11 15-354 (69-53)	下水流	志布志町井手平字下水流	○	○	○	-	-
12 15-363 (69-62)	舟手A	志布志町井手平字舟手	○	○	○	-	-
13 15-364 (69-63)	舟手B	志布志町井手平字舟手	○	○	○	-	-
14 15-369 (69-64)	上原A	志布志町井手平字上原	○	○	○	-	-
15 15-371 (69-66)	上原B	志布志町井手平字上原	○	○	○	-	-
16 15-373 (69-65)	舟手C	志布志町井手平字舟手	○	○	○	-	-
17 15-380 (69-79)	丸山遺跡	志布志町井手平字丸山	○	○	○	-	-
18 15-381 (69-82)	片野跡	志布志町井手平字片野	○	○	○	-	-
19 15-393 (69-92)	大代	志布志町井手平字大代	○	○	○	-	-
20 15-394 (69-83)	宇平	志布志町井手平字宇平	○	○	○	-	-
21 15-395 (69-84)	次丘	志布志町井手平字次丘	○	○	○	-	-
22 15-397 (69-95)	見島地下式窯	志布志町井手平字見島	○	○	○	-	-
23 15-398 (69-97)	見島	志布志町井手平字見島	○	○	○	-	-
24 15-399 (69-88)	見島	志布志町井手平字見島	○	○	○	-	-
25 15-399 (69-89)	下段C	志布志町井手平字下段	○	○	○	-	-
26 15-391 (69-90)	下段D	志布志町井手平字下段	○	○	○	-	-
27 15-392 (69-91)	馬鹿城跡	志布志町井手平字馬鹿城	○	○	○	-	-
28 15-397 (69-95)	御馬A	志布志町井手平字御馬	○	○	○	-	-
29 15-398 (69-97)	御馬B	志布志町井手平字御馬	○	○	○	-	-
30 15-400 (69-96)	如意C	志布志町井手平字如意	○	○	○	-	-
31 15-400 (69-99)	如意	志布志町井手平字如意	○	○	○	-	-
32 15-401 (69-100)	中央A	志布志町井手平字中央	○	○	○	-	-
33 15-402 (69-101)	中央B	志布志町井手平字中央	○	○	○	-	-
34 15-403 (69-102)	田畠	志布志町井手平字田畠	○	○	○	-	-
35 15-405 (69-104)	上原	志布志町井手平字上原	○	○	○	-	-

近代

太平洋戦争末期、アメリカ軍の南九州上陸作戦（オリンピック作戦）を予想した日本軍は志布志満洲沿岸に洞窟式の地下陣地を造った。その現存している一つが、志布志町恵良島水際陣地跡である。また、野井倉台地には戦争末期に飛行場（野井倉飛行場）が建設されている。

本遺跡が所在する有明町は、「蓬原開田」や「野井倉開田」に代表されるように農業の歴史として語られており。蓬原開田の馬場藤吉氏や野井倉開田の野井倉基兵衛氏等地域住民を中心に進められた事業は、学校教育等で紹介されている。

（参考文献）※未掲載調査報告書は割愛した。

有明町編纂委員会委員会 1980『有明町史』

梅原光治 1944「大隅免見の荒形石器」『人類学雑誌』39-7

大木公彦・内村公大 2012『夏井海岸の地形・地質調査報告書』志布志市教育委員会

大西哲和・鍾ヶ江賢二・松崎大綱 2012『志布志市有明町原古墳の測量調査』『鹿児島考古』42 鹿児島県考古学会

鹿児島県教育委員会 1991『大隅地盤の道路』歴史の道調査報告書5

志布志町説明委員会 1972『志布志町の上』巻

志布志町教育委員会 1982『志布志の郷土史叢書』第2集

志布志町教育委員会 1985『志布志の郷土文化財』

遺跡番号 (田番号)	遺跡名	所在地	目 標 地 形	古 代 的 的 的 性	中 古 的 的 的 性	近 代 的 的 的 性
36 15-496 (69-105)	牧	志布志町蓬原字牧ほか	○	○	○	○
37 15-423 (69-106)	平十塚	志布志町蓬原字平十塚	○	○	○	○
38 15-427 (69-106)	平十	志布志町蓬原字平十	○	○	○	○
39 15-456 (69-105)	船入	志布志町蓬原字船入ほか	○	○	○	○
40 15-457 (69-106)	船上	志布志町蓬原字船上ほか	○	○	○	○
41 15-459 (69-107)	木舟	志布志町蓬原字木舟ほか	○	○	○	○
42 15-459 (69-108)	木舟追	志布志町蓬原字木舟追ほか	○	○	○	○
43 15-460 (69-108)	船上	志布志町蓬原字船上ほか	○	○	○	○
44 15-463 (69-109)	蓬原	志布志町蓬原字蓬原ほか	○	○	○	○
45 15-482 (69-161)	上原E	志布志町蓬原字上原ほか	○	○	○	○
46 15-483 (69-162)	下原	志布志町蓬原字下原	○	○	○	○
47 15-561 (69-163)	中原	志布志町蓬原字中原ほか	○	○	○	○
48 15-495 (69-160)	田原	志布志町蓬原字田原ほか	○	○	○	○
49 15-496 (69-165)	西原追	志布志町蓬原字西原追ほか	○	○	○	○
50 15-494 (69-160)	西原	志布志町蓬原字西原ほか	○	○	○	○
51 15-495 (69-164)	荒原	志布志町蓬原字荒原ほか	○	○	○	○
52 15-496 (69-164)	西原A	志布志町蓬原字西原Aほか	○	○	○	○
53 15-497 (69-165)	西原B	志布志町蓬原字西原Bほか	○	○	○	○
54 15-498 (69-167)	上原	志布志町蓬原字上原ほか	○	○	○	○
55 15-499 (69-168)	上原E	志布志町蓬原字上原Eほか	○	○	○	○
56 15-500 (69-169)	上原F	志布志町蓬原字上原Fほか	○	○	○	○
57 15-494 (69-187)	上原C	志布志町蓬原字上原Cほか	○	○	○	○
58 15-495 (69-187)	上原D	志布志町蓬原字上原Dほか	○	○	○	○
59 15-496 (69-189)	西原追	志布志町蓬原字西原追ほか	○	○	○	○
60 15-491 (69-190)	西原追B	志布志町蓬原字西原追Bほか	○	○	○	○
61 15-492 (69-191)	上原A	志布志町蓬原字上原Aほか	○	○	○	○
62 15-493 (69-192)	上原B	志布志町蓬原字上原Bほか	○	○	○	○
63 15-494 (69-193)	上原C	志布志町蓬原字上原Cほか	○	○	○	○
64 15-495 (69-194)	上原D	志布志町蓬原字上原Dほか	○	○	○	○
65 15-496 (69-195)	蓬原	志布志町蓬原字蓬原ほか	○	○	○	○
66 15-499 (69-196)	蓬原	志布志町蓬原字蓬原ほか	○	○	○	○
67 15-500 (69-196)	蓬原上	志布志町蓬原字蓬原上ほか	○	○	○	○
68 15-501 (69-196)	蓬原下	志布志町蓬原字蓬原下ほか	○	○	○	○
69 15-507 (-)	牧J.A	志布志町蓬原字牧J.Aほか	○	○	○	○
70 15-509 (-)	牧J.B	志布志町蓬原字牧J.Bほか	○	○	○	○



第2図 周辺遺跡図 (1 : 25,000)

66が和田上遺跡



明治35(1902)年



第3図 周辺環境の変遷 (1:50,000)

平成12(2000)年

第3章 調査の方法

第1節 発掘調査の方法

1 発掘作業の方法

調査範囲は堀整備によって埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲である。ただし、東側の畠地に接する箇所は土手が設けられるため、2m控えた。その結果、47×8mの範囲となった（第4図）。

調査区の基準軸は、調査範囲の中心を通る直線を南北軸とし、これに直行する軸を東西軸とした。これを基準に、10m間隔で北から南へA・B…、東から西へ1・2とグリッドを設定した。なお、グリッドの設定は光波トランシットを用いて、調査担当者が行った。

レベルは県農政部が提示した事業実施計画図面に基づくBM5（海拔46.683m）から引用した。なお、BMが調査区から約200m離れているため、調査担当者がレベル移動を行った。

発掘作業は表土～Xa層上部を重機により除去し、Xa層下部から人力（鍬鋤・山鋤）により掘り下げを行った。土がかなり硬質であること、そして出土遺物が少ないことから、掘り下げには鍬鋤を中心用いた。また、剥片石器が出土した際はその周辺をねじり鎌で掘り下げた。

包含層（Xc・Xe層）から出土した遺物は平板測量により取上げた。出土遺物のうち、平板取上げを行ったものは183点で、遺構内出土遺物及び括取上げ分を含める191点（コンテナケース2箱分）になる。

遺物出土状況の写真撮影は時期比定可能なものや完形のものを主な対象とした。なお、フィルムは35mmのカラー・白黒・カラーリバーサルの3種類を使用した。

遺構検出は表土刺さり後のIX層（アカホヤ火山灰層）上面とXⅠ層（蘿摩火山灰層）上面で行った。また、コンター図作成はXⅠ層上面で行った。なお、IX層上面では遺構は確認されていない。

2 遺構の調査方法

検出された遺構には集石（SS）2基、土坑（SK）2基（1基は連穴土坑）がある（第5図）。これらの遺構は検出状況の写真撮影後、掘り下げ、出土遺物の写真撮影・取上げ、土層断面実測・撮影、完掘、完掘状況実測・撮影を行った。

集石の掘り込みと土坑の掘り下げは半裁法を用い、堆土の違いを比較しながら移植ゴテを行った。なお、集石の掘り込みと連穴土坑については断ち割り調査も行っており、実測は個別に行い、出土遺物も個別の図面に記録している。

調査中及び終了後、遺構の検出層や埋土状況、遺構内出土遺物、上層断面等の情報から、遺構の形成時期や性格等の検討を行った。

3 整理作業の方法

土器等の洗浄はブラシを用い、剥片石器は超音波洗浄器を用いて土の除去を行った。

注記は遺跡名を表す「WDU」を頭に、包含層出土遺物は続けて「区」「層」「取上番号」の順で記入した。

遺構出土遺物は「WDU」に続けて「区」「遺構記号」

「取上番号」の順で記入した。なお、石器のうち、石籠や剥片等の小型のものについては注記を行っていない。

集石出土の種についても注記を行わず、「遺構番号」「取上番号」を記載したシールを貼っている。

土器の接合は分類後にを行い、包含層と遺構間の接合も試みた。石器の接合は時間的制約等から行っていない。

集石の接合はまず集石内で行い、その後集石間、集石と包含層出土土器との接合を行った。

接合後、実測及び報告書掲載のための抽出を行い、実測・トレース・拓本を行った。実測遺物には実測番号を付けて作業管理を行った。土器については実測作業と並行して立体顕微鏡を用いた胎土観察を行った。

遺物・遺構実測図のトレースはロッティングペンを用いた。なお、遺物分布・遺構配置図の作成にはデジタル技術を用いた。

4 出土遺物の分類・抽出の方法

（1）土器

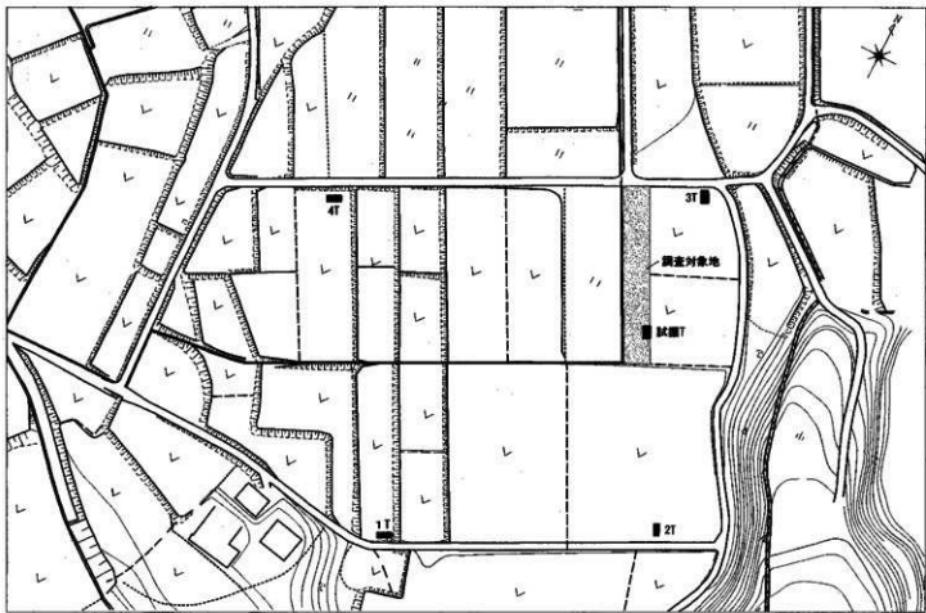
土器はアカホヤ火山灰層下位のXc・Xe層から出土しているため、全て縄文時代早期に比定される。分類は主に既存の型式にあてはめて行った。小片等で判断できないものは「無文土器」として扱っている。分類の詳細は第4章において述べる。

実測及び報告書掲載遺物の抽出について、各類の中で数量が多いものは口縁部や底部など特徴的なものを優先した。また小片であっても各類の中で少数のものや時期比定可能なものは抽出した。

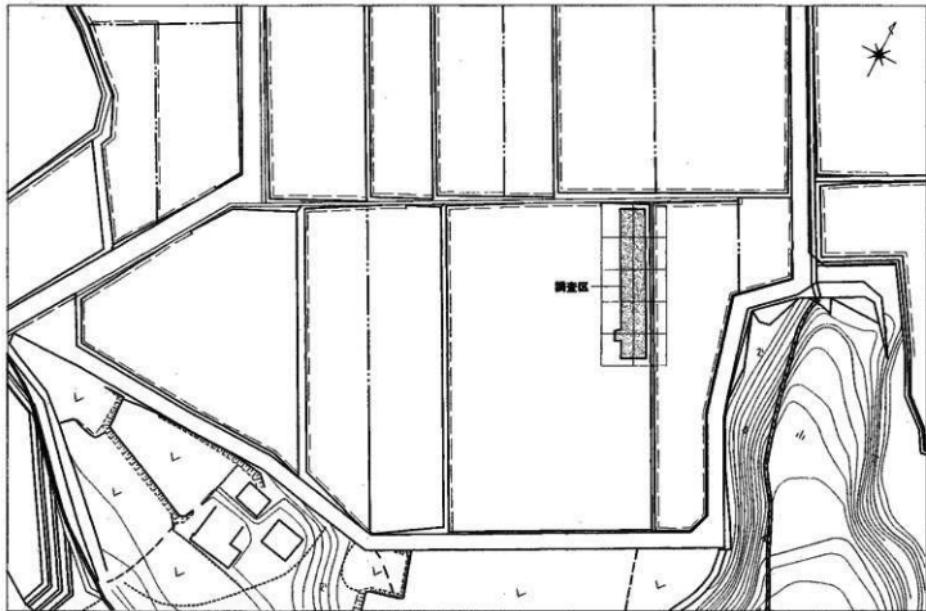
（2）石器

石器も土器と同じくXc・Xe層から出土しており、縄文時代早期に比定されるものの、旧石器時代細石刃文化期の石器も認められている。それらは旧石器時代のものと判断できるものを報告している。器種ごとに分類し、さらにその器種内で石材分類を行った。詳細は第4章において述べる。

報告書掲載遺物の抽出は器種の中で数少ないものはそのほとんどを、数多いものは特徴的なものを優先した。なお、一部石器の実測・トレースについて業務委託を行っている。



(整備前)

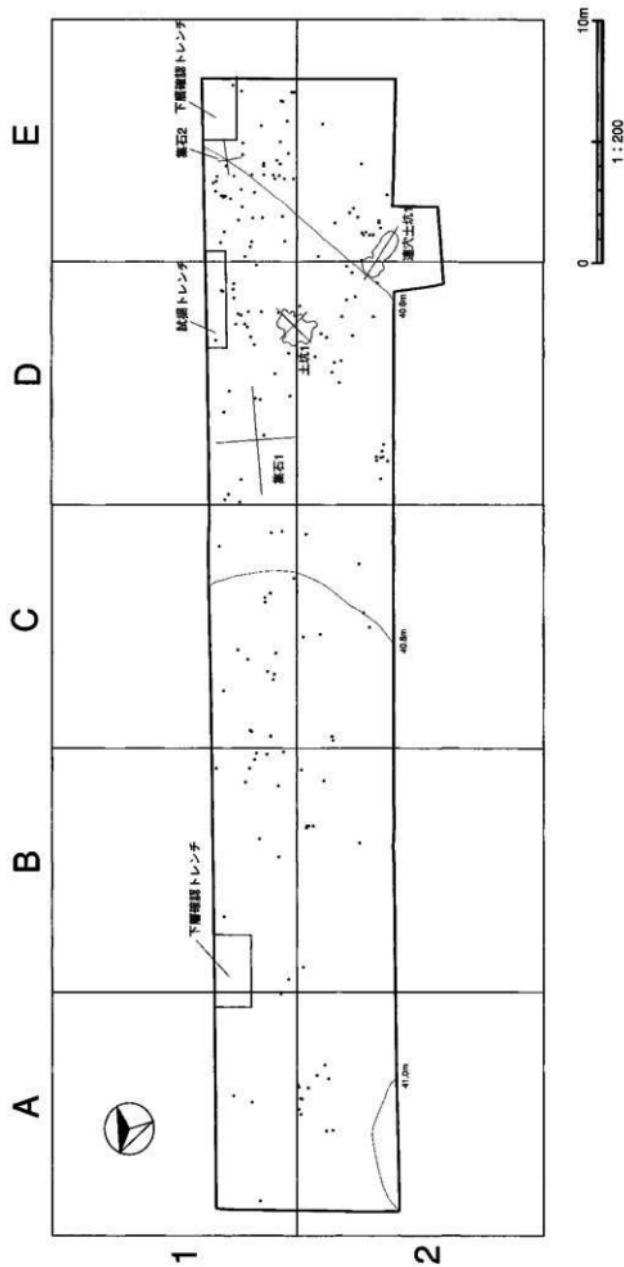


(整備後)

第4図 調査区位置図 (1 : 1,500)

0 20m

第5図 通称記号図・遺物分布図



(3) 石材分類

石材分類について、肉眼観察による石材产地推定がある程度可能な黒曜石に関しては細分を行った。黒曜石以外には玻璃質安山岩・珪質頁岩・砂岩が認められている。各石材の詳細は以下の通りである。

黒曜石Ⅰ類

不純物を多く含み、漆黒で光を通さないもの。上牛鼻などで採取される黒曜石に類似する。

黒曜石Ⅱ類

透明感があり、不純物を多く含むもの。アメ色～青味がかった灰色を呈する。薄状の流理が認められるものもある。三船で採取される黒曜石に類似する。

黒曜石Ⅲ類

不純物を含まないもので、アメ色～黒色を呈し、透明感があるもの。桑ノ木津留・上青木などで採取される黒曜石に類似する。

玻璃質安山岩

元来は黒色を呈するが、風化すると灰白色を呈するもの。不純物をほとんど含まない。

珪質頁岩

表面にぬめりをもち、油脂光沢があるもの。黒色及び白色を呈する。

砂岩

やや黄色味を帯びた灰色を呈し、粒子が粗いものと、灰白色を呈し、粒子が細かいものがある。

第2章 層序

基本層序は平成20年度に実施された確認調査時のものを利用した。調査対象地盤は既にⅡ～Ⅶ層が削平されている。本遺跡の基本層序は第6図に示した。なお、土層断面図(第7・8図)から、地形が南側に傾斜していることが分かる。以下、各層について説明する。

Ⅰ層：オリーブ黒色(7.5Y3/2)のシルト質土で、縮まりはない。層中に白色軽石を含む。層厚は約20cm。

Ⅱ層：オリーブ黒色(5Y3/1)のシルト質土で、縮まりがある。径約2～5cmの池田障下軽石を含む。層厚は約20cm。場所によっては削平されている。

Ⅲ層：色調により、a・b層に細分できる。アカホヤ火山灰層である。

Ⅳa層：明黄褐色(10YR6/6)のシルト質土で、縮まりがある。下部には黄褐色軽石を多く含む。層厚は約50cm。

Ⅳb層：灰黃褐色(10YR5/2)の砂質土で、かなり硬質である。層中に黄褐色軽石をわずかに含む。層厚は約15cm。調査範囲の一部に認められる。

Ⅴa層：黒色(7.5Y2/1)のシルト質土で、縮まりがある。やや粘性をもつ。層中にバニスなどを含まない。層厚は約10cm。

Ⅴc層：黑褐色(2.5Y3/1)のシルト質土で、かなり硬

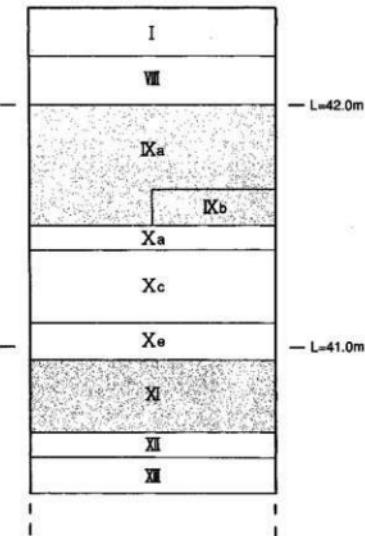
質である。層中に暗褐色バニスを含む。層厚は約30cm。縄文時代早期の遺物を含む。本層中で集石を検出した。

Ⅵe層：にぶい黄褐色(10YR6/3)のシルト質土で、かなり硬質である。層厚は約15cm。縄文時代早期の遺物を含む。

ⅦI層：灰褐色(7.5YR6/2)のシルト質土で、かなり硬質である。層中に黄色を呈するブロック状の塊が認められる。黄色軽石を含む。層厚は約30cm。薩摩火口川灰層である。本層上面において上坑と透穴土坑を検出した。

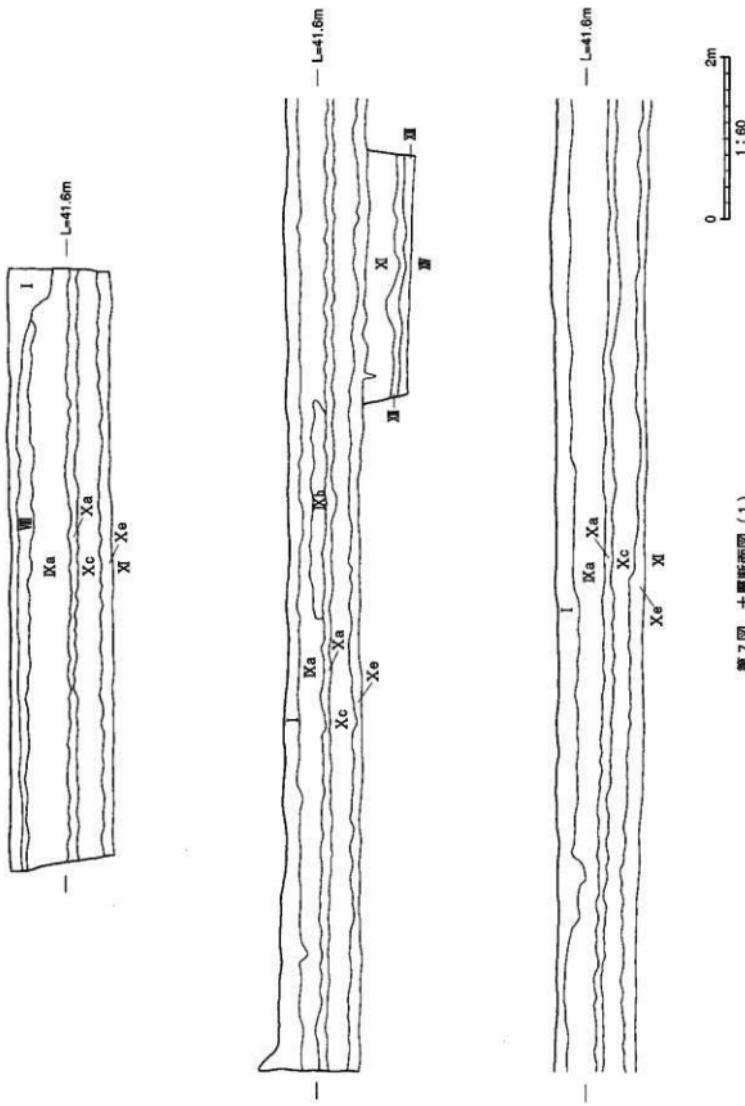
ⅧII層：にぶい褐色(7.5YR6/3)のシルト質土で、粘性をもつ。層厚は約10cm。旧石器時代細石刃文化期の遺物を含むが、今回の調査では認められていない。

ⅨIII層：にぶい褐色(7.5YR6/4)のシルト質土で、強い粘性をもつ。層中に径2cm程の小礫を含む。層厚は15cm。旧石器時代細石刃文化期の遺物を含むが、今回の調査では認められていない。

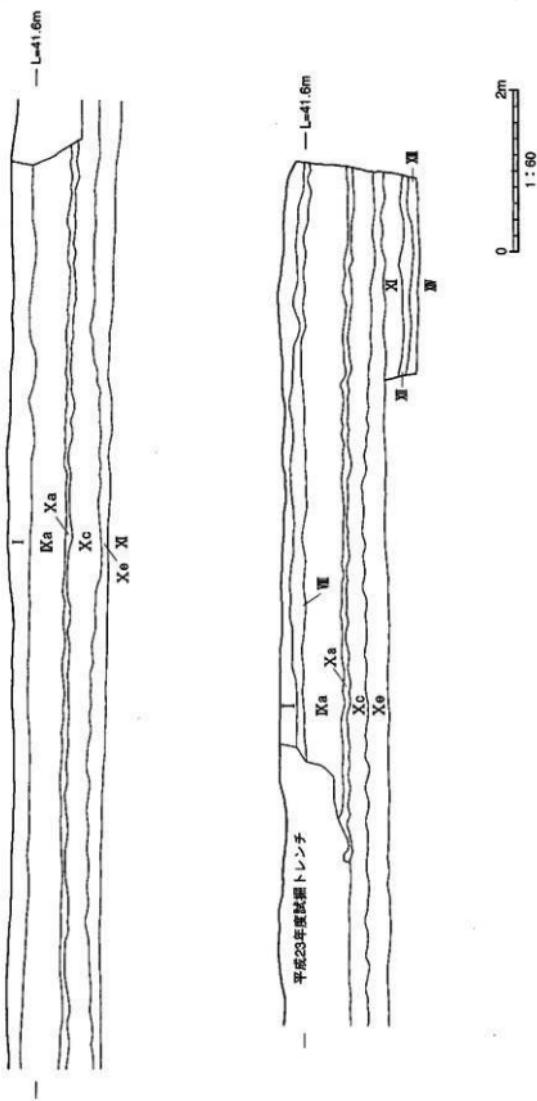


第6図 土層柱状図

第7図 土層断面図(1)



第6図 土壌断面図(2)



第4章 調査の成果

第1節 旧石器時代の調査

1 調査の概要

今回の調査はXⅠ層(庵摩火山灰層)上面で終了しているため、旧石器時代の遺構は認められない。

遺物はXc・Xe層及び廻穴土坑内から、縄文時代早期の遺物とともに出土している。そのため、旧石器時代のものと判断できる石器のみを抽出した。

2 遺物(第9図1~4)

旧石器時代の遺物は全て縄石刀文化期のもので、縄石刀核と縄石刃が認められた。主にE区から出土している。

縄石刀核(1・2)

2点確認し、全て図示した。

1は黒色を呈する珪質頁岩の円礫を素材とするものである。右側面に大きな剥離面がみられることから、厚手の礫を分割して素材としている。半削してできた分割面を打面として、表・裏面に縄石刀剥離を行っている。裏面にはステップが認められる。

2は白色を呈する珪質頁岩を素材とするもので、平坦な筋面を打面とする。右側面・裏面に平坦な剥離面が残る。わずかに打面調整が認められる。

縄石刃(3・4)

2点確認し、全て図示した。ともに黒曜石製である。

3は中間~尾部である。4は尾部で、右側縁に微細剥離が認められる。

第2節 縄文時代の調査

1 調査の概要

遺構はXc層中から集石(S S)2基、IX層上面において土坑(SK)が2基検出された。

遺物は主にXc・Xe層及び土坑内から出土している。調査区南側のC~E区からの出土が多い。

2 遺構

(1) 集石1号(S S 1)(第10図)

D-1区Xc層の掘り下げ中に検出した。焼疊がある程度集まっていたため、集石と認定した。

疊は370×310cmの範囲に認められ、一部疊が集中している箇所があるので、残りは散在している。

疊が集中している箇所を集石の中心部と想定し、そこを基準に南北と東西の十字軸を設定した。平面図と見通し断面図を作成しながら疊を取上げた。

疊の取上げ後、掘り込みの有無を確認するために精査を行った。その結果、疊が集中していた箇所の土色がやや黒味を帯びていたことから、そこを掘り込みと判断した。

掘り込みは北半を半截した。掘り込み内からも疊が認められた。疊のレベル差は約30cmある。掘り込みの埋土は単一層であり、黒褐色(10YR2/2)のシルト質土で、かなり縮まっている。層内にXc・Xe層土や明黄褐色バニスやXⅠ層のブロックを含む。底面はテラス状の段が4つあり、いびつな形状となる。検出面からの深さは

掘り込みの平面形は95×75cmの長方形である。検出面からの深さは約20cmで、基盤層はXc層となる。なお、半截終了後に掘り込みの輪郭の再確認と埋土観察のために、断ち割り調査を行った。

掘り込み内外では0.5cm以下の炭化物が若干認められたものの、埋土は認められなかった。また疊が集中している箇所から約180cm離れたところで、1個土器の底部片の一部(第14図11)が認められた。

疊は102点取上げたが、接合後には38点となった。D-1区Xc層出土の疊と接合したものもある。2~10cmの大角疊が主体となる。石材は頁岩が中心で、残りは砂岩・安山岩・凝灰岩が認められる。磨石を転用したものもある。ほぼ全ての疊が赤化しており、最大9点接合するものも認められるなど、破碎が著しい。黒色物質が付着しているものもある。

出土遺物(第12図5)

砂岩を素材とした磨石・敲石である。被熱破碎しており、破碎疊が4点接合したものである。表裏面に磨面が認められ、側面には敲打痕が認められる。

(2) 集石2号(S S 2)(第11図)

E-1区Xc層の掘り下げ中に検出した。焼疊が周囲に比べて多数出土したため、集石と認定した。

疊は155×120cmの範囲に認められ、全体的に散在している。平面と見通し断面図を作成しながら、疊を取上げた。疊のレベル差は約15cmで、ほぼフラットな状態である。

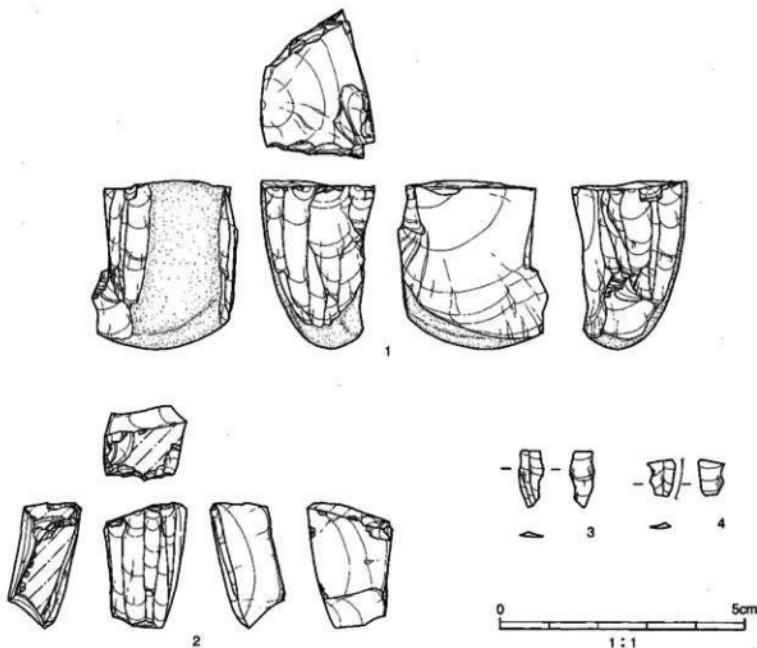
疊の取上げ後に精査を行ったが、掘り込みは認められなかった。また、焼土や炭化物、出土遺物も認められなかった。

構成疊は18点取上げたが、接合後には13点となった。C-1区Xc層出土の疊と接合したものもある。3~8cmの大角疊が主体を占める。石材は砂岩である。赤化は目立たないものの、黒色物質が付着したものがある。

(3) 土坑1号(SK 1)(第11図)

D-1・2区XⅠ層上面において検出した。検出時の平面形は170×140cmで、いびつな形状を呈する。

長軸方向を基準にして、南北を半截した。埋土は単一層であり、灰黃褐色(10YR4/2)のシルト質土で、かなり縮まっている。層内にXc・Xe層土や明黄褐色バニスやXⅠ層のブロックを含む。底面はテラス状の段が4つあり、いびつな形状となる。検出面からの深さは



第9図 旧石器時代遺物

約20~25cmを測り、基盤層はX I層となる。

焼土や炭化物、出土遺物は認められなかった。

(4) 連穴土坑1号(SK 2) (第11回)

D・E-2区のX I層上面において検出した。土坑の一部が調査区外に延びていたために拡張した。拡張部を掘り下げる際、X c層上面での検出が可能かどうかを試みた。その結果、土坑の壠土と考えられる箇所は明黄褐色バミスが集中するものの、掘り込みの輪郭は把握できなかった。そのため、掘り下げを継続し、X e層上面で検出した。

平面形は約200×90cmの長楕円形を呈する。くびれ部分があつたため、検出の段階で連穴土坑の可能性が高いと考えられた。

掘り下げは長軸方向を基準にして、東半を半蔵した。壠土は以下の4層に分けられた。

壠土a: 黒褐色(2.5Y3/1)のシルト質土で、締まっている。明黄褐色バミスを多く含む。色調はX c層と同じだが、X c層よりバミスを多く含む。層厚は約10cm。

壠土b: 黒褐色(7.5YR3/2)のシルト質土で、締まっている。X e層をブロック状に含む。明黄褐色バミスを少々含む。層厚は約15cm。

壠土c: 黒褐色(10YR2/2)シルト質土。やや粘性がある。明黄褐色バミスを極少量含む。白色砂粒を含む。層厚は約30cm。

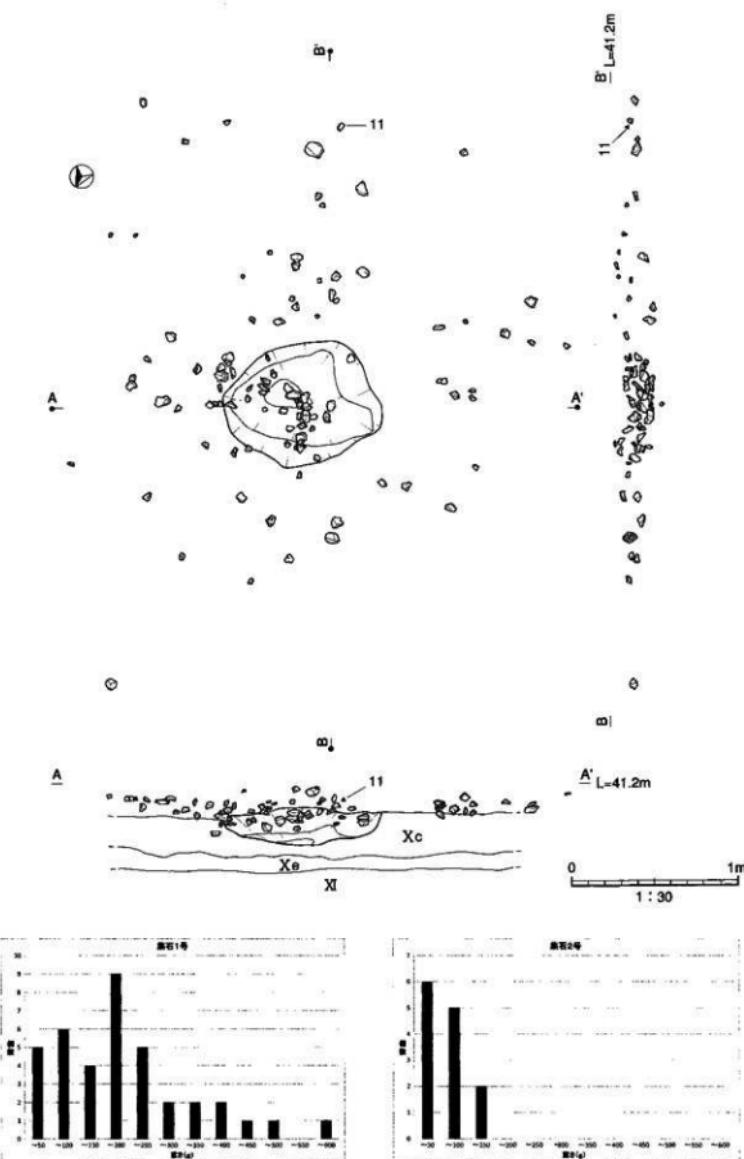
壠土d: 黒褐色(7.5YR2/2)シルト質土。粘性が強い。X II・X III層土を含む。X I層の黄色鉄石を極少量含む。層厚は約20~25cm。

検出面(X e層)からの深さは約65~75cmを測り、基盤層はX III層となる。北に向かって傾斜している。

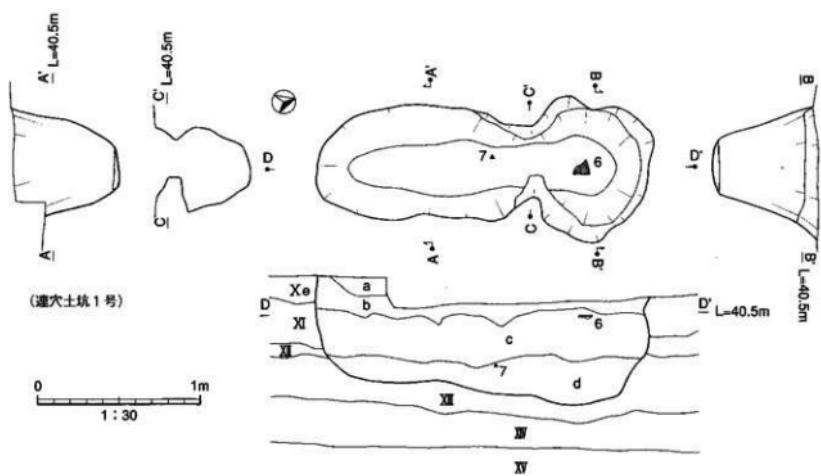
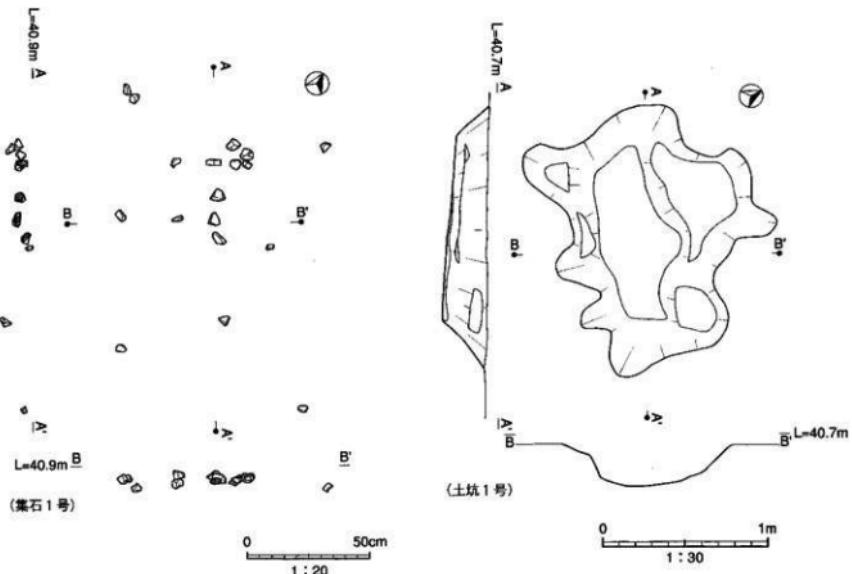
土坑の東西両壁にはX I層が突出した箇所があることから、これがブリッジの名残と考えられる。推定される煙道部の大きさは約50×40cmを測る。

壠土や底面に炭化物は認められなかった。また底面に焼土は確認できなかった。出土遺物は壠土cから1箇所器が、壠土dから縞石刃核が認められた。

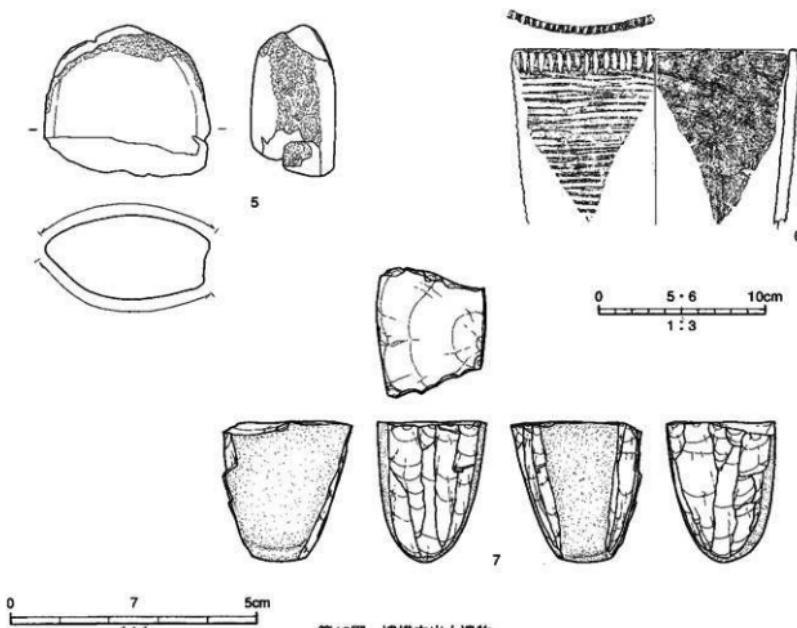
完掘後、「シミ状痕跡」の有無を確認するために所



第10図 集石1号実測図・集石構成礫重量グラフ



第11図 集石 2号・土坑 1号・窑穴土坑 1号実測図



第12図 遺構内出土遺物

ち割り調査を行ったが、認められなかった。

出土遺物（第12図6・7）

6は1類土器である。口縁端部に縦位のヘラ状工具刺突文があり、口唇部には刻みが施されている。外面には横位の貝殻条痕調整が、内面には斜位のケズリ調整が行われる。

7は灰白色を呈する砂岩の扁平円錐を素材とするものである。半割してできた分割面を打面として、表裏面に細石刃剥離を行っている。表・裏面の右側にはステップが認められる。

3 繩文時代土器（第14図8～20）

本遺跡出土の縩文土器は、すべて縩文時代早期に比定され、主にXc層で出土している。土器の全出土遺物数は62点、接合作業を経て37点と少ない。形態及び文様により5類に細分した。

1類土器はD・E区、2・3類土器はB・C区での出土傾向があり、調査区南側ほど出土量は増えていく（第13図参照）。

1類土器（8～11）

主に胴部外面に貝殻条痕が残る一群である。14点出

土し、4点図示した。

8・9は、口縁部上端に縦位のヘラ状工具刺突文を1条巡らし、器形は胴部から緩やかに傾斜しながら口縁部に至る。外面には横位の貝殻条痕調整、内面にはケズリ調整が行われており、器壁が比較的薄く仕上げられている。また、8は補修孔が確認できる。

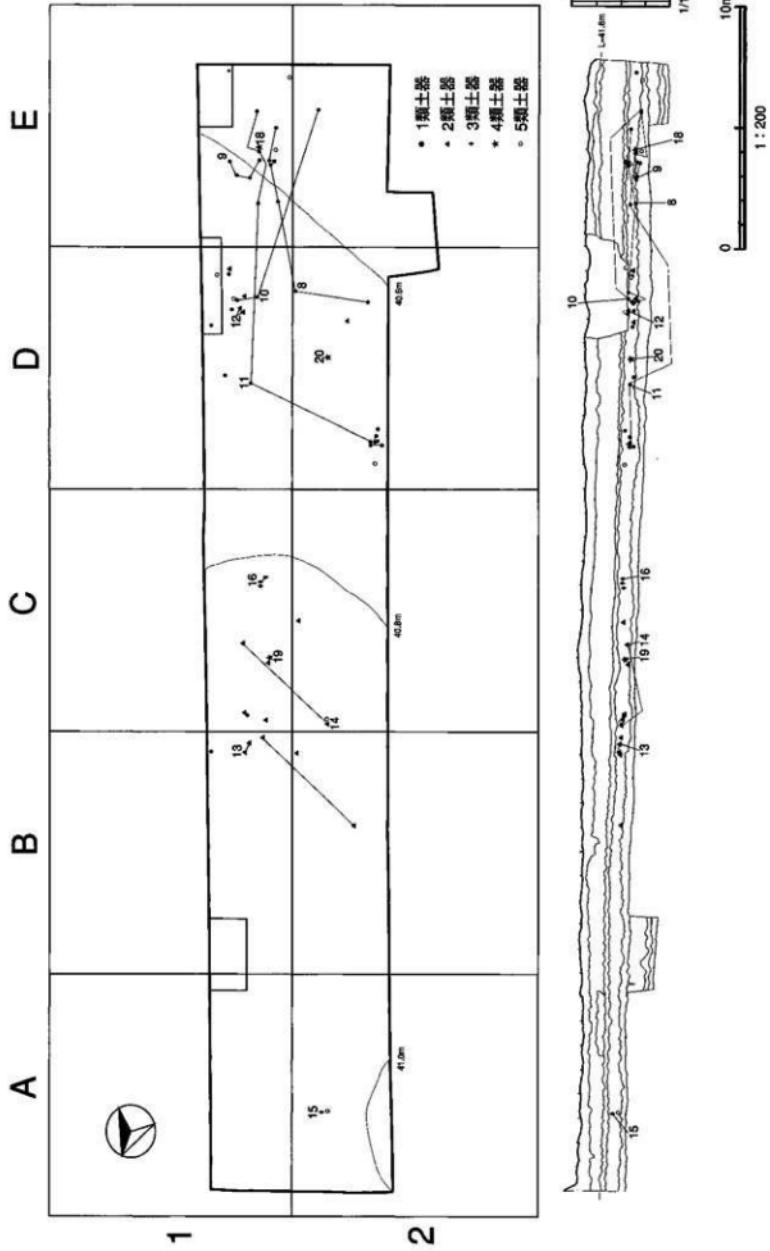
10は脚部片である。やや外反しながら口縁部に至る器形であると考えられる。

11は底部である。8・9と同様に緩やかに外傾しながら胴部に至る器形になると考えられる。外面には横位の貝殻条痕調整が行われているが、底端部にはみられない。内面は上方に向へのケズリ調整が行われており、部分的に調整痕の始点が隆起して残っている。胎土に石英・長石類を多く含む。

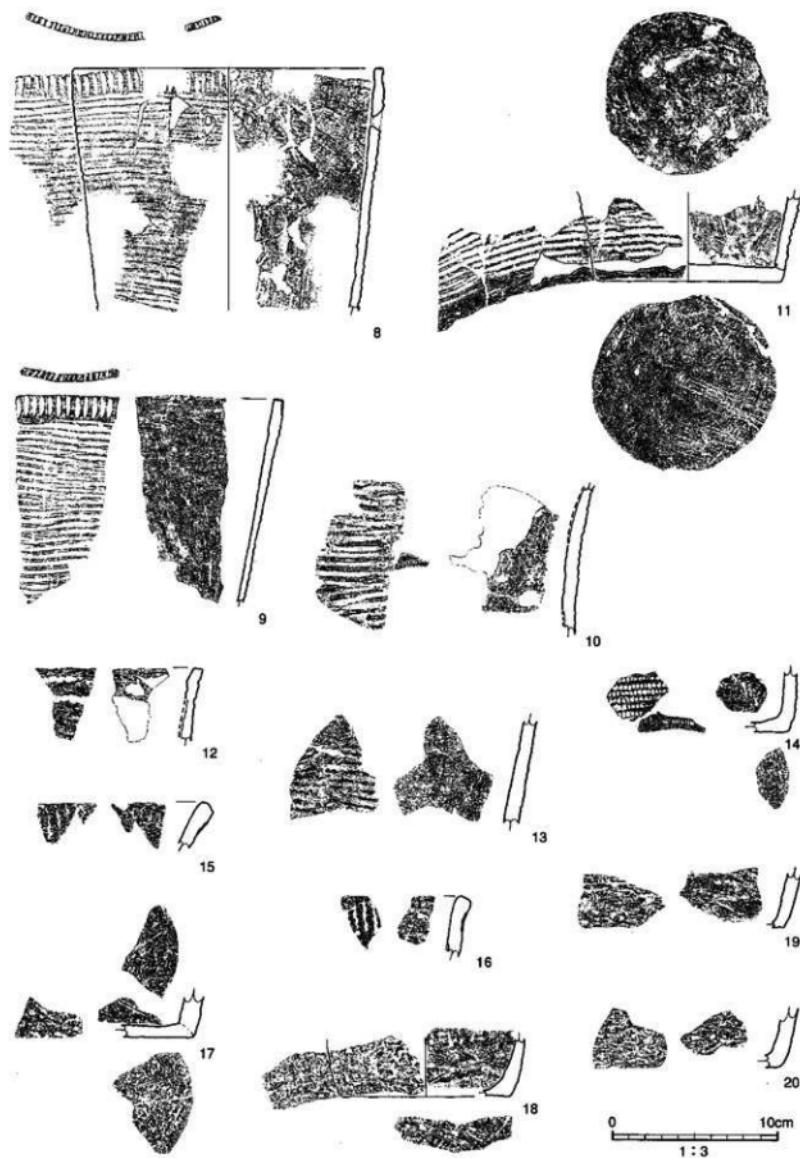
なお、6・8・9・11は、文様・形態が類似していることから、同一個体の可能性が高い。

2類土器

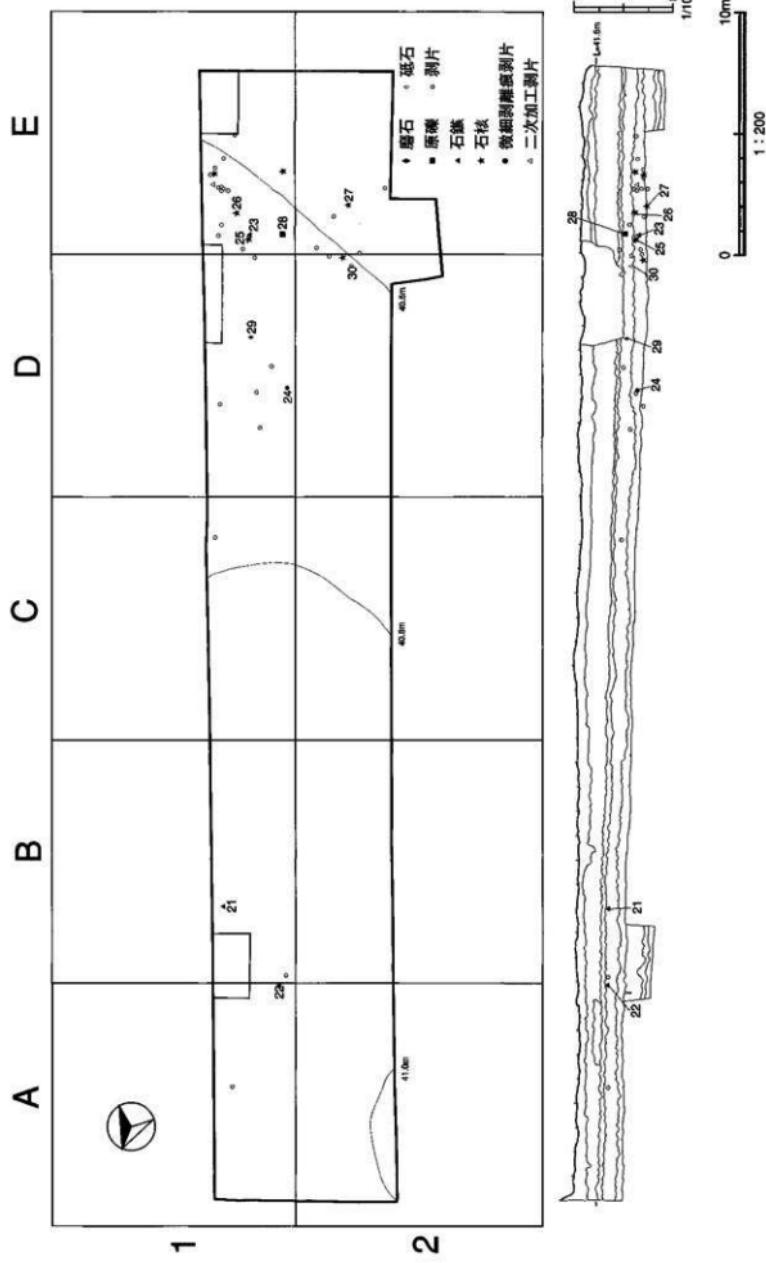
外面に貝殻腹縁刺突文及び貝殻押引文を施す一群である。文様により、2類に細分した。



第13圖 繩文時代早期土器分布圖

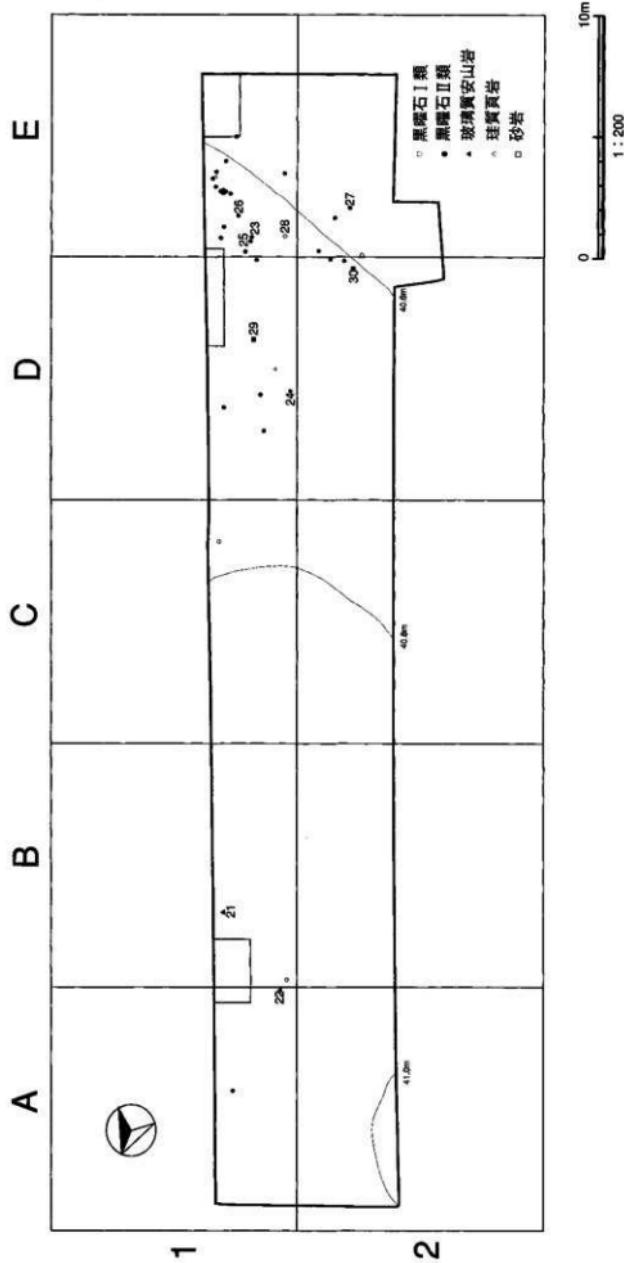


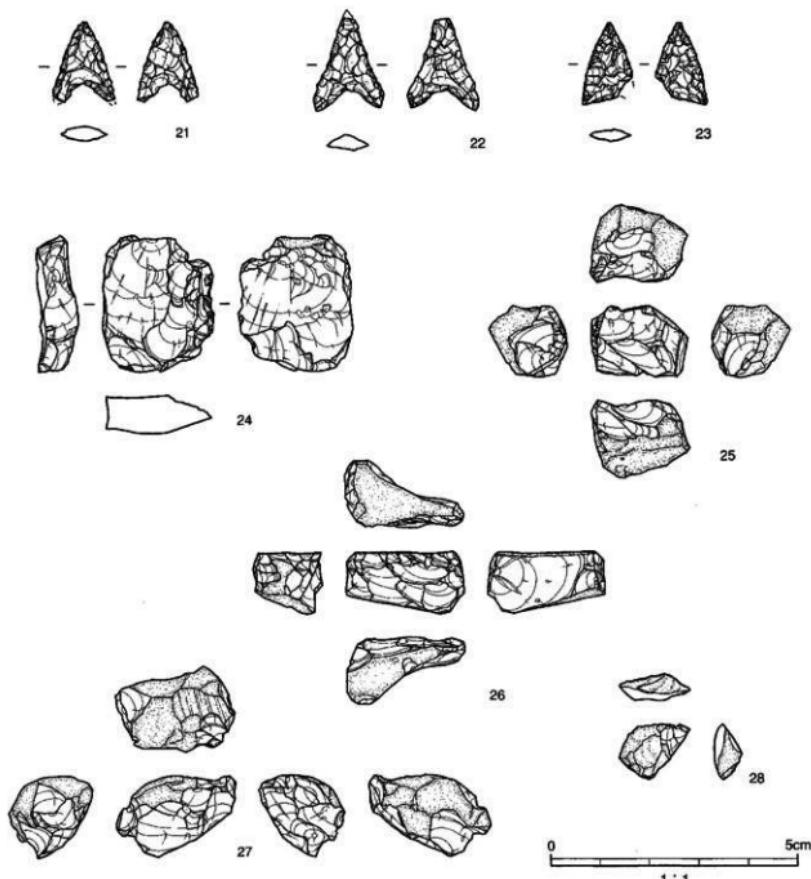
第14図 縄文時代早期土器



第15図 綱文時代早期石器分布図（器種別）

第16図 繩文時代早期石器分布図（石材別）





第17図 繩文時代早期石器（1）

2 a類土器 (12)

口縁部片である。1点出土した。外面に貝殻腹縫部による刺突文が2条みられる。

2 b類土器 (13・14)

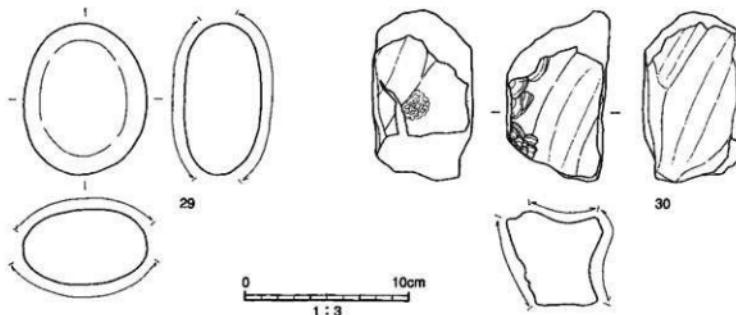
胸部に貝殻押引文を施すものである。10点出土し、2点圓化した。13は胸部片である。やや摩滅しているため確認しづらいが、外面に間隔の広く浅い貝殻押引文を施している。胎土に石英・長石類を多く含む。

14は底部片である。外面に密な貝殻押引文を施し、器形は底部から胴端部までは直線的に立ち上がる。

3類土器 (15・16)

口縁端部で外傾する器形を呈すると考えられる一群である。3点出土し、2点圓化した。

15・16とも外面にやや斜位の貝殻刺突文を施している。口縁端部が外傾する器形になると想われる。胎土・色調が類似していることから、同一個体の可能性



第18図 繪文時代早期石器（2）

も考えられる。

4 類土器（17～20）

無文の底部片を一括した。4点出土し、全て図示した。全て内外面にはナデ調整が行われ、底部から緩やかに外傾しながら立ち上がる器形を呈する。

18は底面の器壁が薄く作られており、胎土に石英・長石類が多く含む。

5 類土器

無文の胴部片を一括した。11点出土した。指頭大程の小片が多く、器形も不明なため図化は省略した。

4 繪文時代石器（第17・18図21～30）

繩文時代の石器は石鏃、微細剥離痕剥片、石核、原礫、磨石、硃石、二次加工剥片、剥片が認められた。器種は剥片が最も多く、石材は黒曜石II類が多い。分布について、D・E区での出土が多い（第15図参照）。

石鏃（21～23）

3点確認し、全て図示した。

21・22は玻璃質安山岩を素材とするもので、全体形は二等辺三角形を呈し、薄手である。基部にわずかな抉りをもつ。

23は黒曜石II類を素材とするもので、全体形は二等辺三角形を呈し、薄手である。基部にわずかな抉りをもつ。側縁に細かな鋸齒状の加工を施す。

21・22はA・B区、23はE区というように分布に偏りがみられる。

微細剥離痕剥片（24）

1点確認した。黒曜石II類を素材とするもので、右側縁に微細剥離が認められる。

石核（25～27）

6点確認し、3点図示した。石材のほとんどが黒曜石II類を素材とするもので、1点のみ珪質頁岩が認められた。

25～27は黒曜石II類を素材とする。いずれも自然面を有するもので、角縁の平凹面を打面にしている。残った自然面から判断すると、小型の穀素材を利用したと考えられる。なお、26はほぼ極限まで剥片剥離が進んでいると考えられる。

原礫（28）

剥片採取を意図した剥離痕が認められないものである。1点確認した。黒曜石I類の角縁で、小型である。

磨石（29）

1点確認した。砂岩を素材とする。表裏面に磨面が認められるものの、顕著なものではない。

砥石（30）

1点確認した。砂岩を素材とする。表・左・右の三面に顕著な研磨面が形成されており、深い筋状の溝みをもつ。表面には幅3cmの溝みが1条、左側面には幅 $3.5 + \alpha$ cmの溝みが1条、右側面には幅5cmと幅 $2 + \alpha$ cmの溝みが2条形成されている。また、左側面中央部には敲打痕が認められる。

二次加工剥片

剥片の一部に二次加工が認められるが、器種認定が困難なものである。1点確認した。

剥片

26点確認した。そのほとんどが黒曜石II類で、調査区南側に分布する傾向がある。

第2表 旧石器時代石器観察表

番号	ル	地名	EC	年	時代	分類	形態	材質	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
6	1	178	D-2	Xo	旧石器	石器	磨石(刃)	磨石(刃)	3.46	2.92	3.04	23.44	—
	2	—	B-2	Xo	旧石器	石器	磨石(刃)	磨石(刃)	2.58	1.72	1.98	5.87	—
	3	—	D-1	Xo	旧石器	石器	磨石(刃)	磨石(刃)	1.15	0.50	0.37	0.04	中國～尾張
	4	—	E-1	Xo	旧石器	石器	磨石(刃)	磨石(刃)	0.75	0.30	0.28	0.02	尾張 滅野の郷古文化
	5	—	E-1	Xo	旧石器	石器	磨石(刃)	磨石(刃)	2.86	2.00	2.00	22.87	—
	12	7	2	—	—	—	—	砂岩	—	—	—	—	—

第3表 桐文時代早期土器観察表

番号	ル	地名	EC	年	分類	外面調査	内部調査	外部色調	内部色調	表面	内面	底面	腹面	アラレ	備考
17	6	—	—	—	—	—	タケツリ(1)	に古い黄褐色(0784/3)	に古い黄褐色(0784/4)	○	△	—	—	—	13.7±1.2cm
7	—	71	33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	—	87	33	B-2	Xo	1	ヨコ貝掛手鏡	タケツリ(1)	に古い赤褐色(0784/6)	相模(0784/6)	○	—	△	△	13.7±1.0cm 縦帶有り
9	—	125	36	V-1	Xo	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	—	72	148	D-1	Xo	1	ヨコ貝掛手鏡	タケツリ(1)	に古い黄褐色(0784/0)	に古い黄褐色(0784/0)	○	△	—	○	△
11	—	76	106	D-1	Xo	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12	—	128	162	B-2	Xo	2	ナゾ	ナゾ	—	黄褐色(0784/0)	○	△	—	○	—
13	—	138	167	B-1	Xo	2	—	—	—	に古い褐色(0784/0)	○	△	—	○	△
14	—	74	75	V-1	Xo	2	ナゾ	—	—	に古い褐色(0784/0)	○	△	—	△	—
15	—	23	59	V-1+2	Xo	2	—	—	—	に古い褐色(0784/0)	○	△	—	△	—
16	—	22	58	B-2	Xo	3	ナゾ	ナゾ	—	に古い褐色(0784/0)	○	○	—	△	—
17	—	95	46	C-1	Xo	3	ナゾ	—	—	花咲(2.0%)	○	○	—	—	—
18	—	177	—	—	—	—	■工具(1)	■工具(1)	■工具(1)	■工具(1)	○	○	—	○	—
19	—	156	—	D-2	Xo	4	■工具(2)	■工具(2)	■工具(2)	■工具(2)	○	○	—	○	■工具(2)
20	—	58	—	C-1	Xo	4	■工具(3)	■工具(3)	■工具(3)	■工具(3)	○	○	△	○	—

第4表 桐文時代早期石器観察表

番号	ル	地名	EC	M	時代	分類	形態	材質	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	
17	6	—	—	SH1	—	桐文	石器	磨石(刃)	砂岩	1.30	16.10	6.20	501.20	—
	21	14	B-1	Xo	—	桐文	石器	—	石器	1.52	1.35	0.20	0.35	—
	23	19	B-1	Xo	—	桐文	石器	—	石器	1.37	1.42	0.30	0.44	—
	32	128	B-1	Xo	—	桐文	石器	—	石器	1.66	1.62	0.25	0.35	—
	34	171	B-1	Xo	—	桐文	石器	—	石器	2.00	2.32	0.87	6.45	—
	35	129	B-1	Xo	—	桐文	石器	—	石器	1.40	1.96	1.00	4.00	—
36	—	121	B-1	Xo	—	桐文	石器	—	石器	1.30	1.70	1.00	3.10	—
37	—	171	P-2	Xo	—	桐文	石器	—	石器	1.60	2.42	1.70	5.50	—
38	—	77	P-2	Xo	—	桐文	石器	—	石器	1.30	1.32	0.34	0.64	—
39	—	181	P-3	Xo	—	桐文	石器	—	砂岩	0.40	7.00	1.70	640.25	—
40	30	102	B-2	Xo	—	桐文	石器	—	砂岩	16.10	4.20	6.20	665.27	—

第5章 総括

第1節 旧石器時代

本遺跡はは場設置の設計上、薩摩火山灰層(XⅠ層)上面までの調査であったが、縄文時代早期の包含層や遺構内から細石刃核と細石刃が出土している。

平成20年度に実施された確認調査では、黒曜石(三船産類似)を素材とした細石刃核(第19図1・2)が認められているが(志布志市教委2010)、今回の調査では砂岩や珪質頁岩を素材としているものも認められている点は興味深い。なお、細石刃について、黒曜石Ⅱ類(三船産類似)と黒曜石Ⅲ類(桑ノ木津留産類似)を素材としており、確認調査時の傾向(三船産類似7点・桑ノ木津留産類似1点)と調和的である。

3点出土した細石刃核のうち、硬質の砂岩を素材とするもの(第12図7)は、こぶし大の円錐を半割してできた分割面を打面として石核調整や打面調整を行わずに細石刃剥離を行っていることから、唯原型細石刃核に比定できる。唯原型細石刃核は特に宮崎平野部に頻繁に分布するもので、砂岩や珪質頁岩の小型扁平円錐と結びつくことが指摘されている(芝2011ほか)。

珪質頁岩を素材とするものの(第9図1)は、右側面に大きな剝離痕が認められることから、厚手の円錐を素材としていることが考えられる。しかし、半割してできた分割面を打面としていることから、これも唯原型細石刃核に比定できよう。

唯原型細石刃核は、県内では主に大隅半島側で認められているものの点数は少ない(桑波田1998)。市内では志布志町中原遺跡(志布志町教委1985)において、硬質の砂岩を素材としたものが2点出土しているのみであり(第19図3・4)、今回新たな類例を追加することになった。

第2節 縄文時代

本遺跡の中心となる時代である。アカホヤ火山灰層(XⅨ層)下位の早期層から土器や石器が出土し、集石や土坑、連穴土坑が検出されている。

1 造構

集石が2基、土坑が1基、連穴土坑が1基検出された。以下、気づいたこと等を述べていきたい。

集石 1・2号とともにD・E区から検出されている。D・E区では主に1類土器(前平式土器)が出土していることから、これらは早期前葉の前平式期に位置づけられる可能性が高い。

集石1号について、取上げた標が102点であったが、接合後は38点となり、接合率が極めて高い。またほぼ全ての標が赤化し、1つの標で最大9点、平均で4点

接合するなど、破碎が著しい。したがって、集石の使用回数は少なくなかつたことが考えられる。一方、集石2号は接合率が低く、標の赤化が目立たないところから、集石の使用回数はあまり多くないと考えられる。

集石1号では最大280cm離れた標が、集石2号では約150cm離れた標が接合しているように、かなり標が散らばっていることから、集石使用後に標が周囲に散在した、あるいは標を周囲に散在させたことが考えられる。

1・2号ともに標に黒色のタール状の付着物が確認できることから、調理の対象として動物質食料が考えられる(八木澤2007)。

土坑 遺構として報告したものの、埋土中から焼土や炭化物などは認められず、また平面プランが不整形で、底面がいびつであることから、人為的なものではない可能性も捨てきれない。

連穴土坑 時期について、1類土器(前平式上器)の破片が埋土aから出土している。このことから、1)連穴土坑の埋没途中で、既に破棄され周囲に散在していたこの土器片が流れ込んだ。2)連穴土坑の埋没途中で前平式土器が破棄され、その破片が流れ込んだ。という2つのパターンが考えられる。どちらかは断定できないが、前平式の型式存続期間中には連穴土坑が埋没し終る、つまり埋没時間はそれほど長くはないと思われるため、前平式期に位置づけられると考えたい。

また、埋土dからは細石刃核も出土している。連穴土坑の復元実験を行った新東晃一氏らは、掘った排土を用いて煙出口の周りに土壁を築き、この上に食材を吊るした棒を架ける方法を用いている(新東1997)。当時も同様の方法を用いていた可能性も考えられる。したがって、連穴土坑の土壁に用いられた排土中にこの細石刃核が含まれており、連穴土坑廃絶後の埋没過程において流れ込んだ可能性がある。

埋土cには水成作用によると思われる、粒の捕った白色砂粒が認められることから、水の溜まっていた期間があった可能性も考えられる。

規模について、足場となる箇所(開口部)の大きさは120×75cmで、身長175cmの男性が余裕をもって入れる大きさである(写真図版参照)。長軸の長さ(A)は205cm、短軸の長さ(B)は90cm、開口部の幅(C)は75cm、煙出部の幅(D)は90cmである。長軸と短軸の比(A/B比)は2.3となり、平面形が細長いことが分かる。開口部幅と煙出部幅の比(C/D比)は0.8となり、あまり差がないことが分かる。

小濱学氏は炉穴(連穴土坑)を形態的特徴から大きく九州型・東海型・関東型の3つに分類し、九州型を比

較的長軸が長く、煙出部幅と開口部の差がないためにほぼ直線的になるとしている（小瀬2007）。本遺跡のものも上記の特徴から九州型にあてはまる。

煙道部の長さについて、草創期後半の連穴土坑は煙道部が長いことから、煙だけを使う冷燃用で、早期前半のものは煙道が短く、熱も上がる温燃用との指摘がある（上田1993・佐多1993）。本遺跡のものも煙道部が短いと想定できることから、温燃用の可能性がある。

この連穴土坑の長軸方向はN-9°-Eとなり、開口部が南に、煙出部が北に位置する。また、長軸方向は等高線とほぼ直行している。本遺跡は菱田川東岸の河岸段丘の中位段丘面の南端に位置し、南に向かって傾斜する地形となる。また、調査期間であった6~8月には南寄りの風が吹いていた。つまり、この連穴土坑は開口部が風下、煙出部が風上となる夏を中心とした時期に使用されていたことが考えられる。

遺跡の性格について 本遺跡では集石と連穴土坑は検出されたものの、堅穴建物は検出されていない。調査面積が要因とも考えられるが、堅穴建物が伴わずに集石と連穴土坑が検出される遺跡は南九州において認められており、市内にも有明町下掘遺跡（有明町教委2004）や横堀遺跡（有明町教委2005）、志布志町稻荷追跡（鹿埋セ2012）がある。

本遺跡が堅穴建物を伴うとするならば、いわゆる「3点セット」（前泊1994）をもつ遺跡となり、「集落の居住区」と位置づけられる（八木澤1994）。一方、堅穴建物を伴わないとするならば、「居住地区から独立した場所にある恒常的な調理地区」の可能性が考えられる（八木澤1994）。

2 土器

本遺跡出土の縄文土器は、すべてIX層（アカホヤ火山灰層）とX I層（蘿摩火山灰層）に挟まれたX層で出土しており、地質年代により縄文時代早期に比定される。ここでは、1~5類に分類した縄文早期土器を既存の型式に比定していきたい。

1類土器は前平式土器に比定される。県内外の出土例により、円筒形や角筒形、レモン形などのバリエーションが確認されているが、本遺跡の前平式土器はすべて円筒形である。また、施文パターンも口縁部はヘラ状工具刺突文、胴部は貝殻条痕と单一である。第4章第2項でも述べたが、同一個体のものも存在することから、実際の個体数は出土点数に比べて少なくなると考えられる。

2類土器は、胴部に貝殻押引文を施す吉田式土器に比定される。小片や胴部が多く、吉田式土器に特徴的な口縁部周辺にみられるクサビ形貼付文の存在が不明であるため、吉田式土器に後続するとされている岩之上段階（黒川2002b）とも考えられる。

なお、13の口縁部片は胴部の施文パターンが不明なため、概に吉田式土器とは言及しにくい。しかし、色調や胎土、土器の雰囲気などにより吉田式～岩之上段階の範疇に含まれるものと考え、2類土器とした。

3類土器は、出土した3点とも口縁部片であるため、胴部の施文パターンが不明ではある。しかし、口縁部にみられる貝殻刺突文と器形から、倉国B式～石板式期の範疇に含まれると考えた。

その他、4類の無文早期底部、5類の無文土器も調整技法や胎土などを観察し、検討を試みた。しかし、出土量が少なくなく、造形比較が出来ないこと、小片が主で土器情報に乏しいことから、型式比定は困難であった。そのため、4類・5類土器が1~3類土器と同一包含層から出土していることを考慮し、おむね前平式～石板式土器と同時期のものであると考えたい。

3 石器（第5表参照）

石器は主にXe層から出土している。上述したようにこの層からは縄文時代早期前業の土器が出土していることから、石器も当該期に位置づけられる。

石器組成について、石礫・二次加工痕剥片・微細剥離痕剥片・石核・原礫・磨石・磨石/敲石・砾石が認められ、石核が最も多い。

石材は黒曜石I類（上牛鼻産類似）、黒曜石II類（三船産類似）、玻璃質安山岩、珪質頁岩、砂岩が認められており、その中でも黒曜石II類が中心となる。

器種別の石材利用について、剥片石器類は黒曜石II類や玻璃質安山岩が、磨石・砾石は砂岩が利用されており、器種に応じた石材利用がある程度うかがえる。

石礫について、黒曜石II類を素材としたもの（第17図23）は薄手で基部の抉りは浅く、玻璃質安山岩を素材としたもの（第17図21・22）はやや厚手で基部の抉りは深めである。平面分布をみると、前者がE区、後者がA・B区で認められる。土器に関して、D・E区では前平式土器（1類土器）、A~C区では吉田式～石板式土器（2・3類土器）が出土していることから、黒曜石II類の石礫は前平式期、玻璃質安山岩の石礫は吉田式～石板式期に位置づけられる可能性がある。つまり、時期によって石材と形態が異なっていたことが考えられる。

黒曜石II類の石礫が前平式期のものであることに加え、黒曜石II類の二次加工痕剥片や石核も、前平式が出土するD・E区から認められる。つまり、本遺跡における前平式期の剥片石器には黒曜石II類（三船産類似）が主に利用されていた可能性が高い。

第3節 補遺

平成22年度において、本遺跡と同じ起因事業により調査が行われた井手上A遺跡では、入佐式土器の埋設

第5表 縄文時代早期石器組成及び石材組成

	黒曜石 I型	多曜石Ⅱ型	玻璃質安山岩	斑質頁岩	砂岩	合計	百分率
石器	—	1	2	—	—	3	7.3%
二次加工底片	—	1	—	—	—	1	2.4%
微細剥離底片	—	1	—	—	—	1	2.4%
磨石	—	—	—	—	1	1	2.4%
磨石・敲打	—	—	—	—	1	1	2.4%
砾石	—	—	—	—	1	1	2.4%
石核	—	5	—	1	—	6	14.0%
刮削	—	1	—	—	—	1	2.4%
剥片	—	2	23	—	1	26	63.4%
合計	—	3	26	2	2	3	41
百分率	—	7.3%	76.8%	4.9%	4.9%	7.3%	—

土器遺構(SJ1)が検出され(第19図5)、翌年度報告がなされている(志布志市教委2012)。この遺構について、若干の補足説明をしておきたい。

この遺構はVla層掘り下げ中に検出された。まず、横位状態の完形土器が見つかり、埋設土器の可能性を考えられたことから、十字形に柱を残して掘り下げを行った。その結果、完形土器の周囲にも180点ほどの上器片が認められた。これら土器片は接合後に数個体分の深鉢形土器となっている。なお、浅鉢形土器が認められなかつたことは興味深い。土器以外にも磨石や石製七具の欠損品、五角形錐、礫も出土している。

検出時及び掘り下げの際も精査を行ったが、掘り込みは確認できなかった。また、完形土器内部の土と周囲の土には違いが認められなかつた。180点ほどの土器片がまとまって出土していることや完形の土器が潰れることなくそのままの姿で出土していることから、穴を掘って破損した土器と完形土器を入れた後、直ちに埋め戻した可能性が考えられる。

出土した土器群(第19図6~8)は、頸部屈曲部と肩部屈曲部の間隔が広いものである。口縁部がやや肥厚し面をつくるもののや口縁部外面に条痕化した文様を施すものも存在する。器面調整はナデあるいはミガキにより丁寧な調整が行われている。これららの特徴から、縄文時代後期の入佐式土器古段階(堂込1997)に位置づけられる。これらは一括資料としての価値が高い。

完形土器は横位状態で検出されている。知る限り、現在のところ県内では横位の埋設土器は認められておらず、正位のものがほとんどである。なお、横位の埋設土器は県外では認められているものの、それらは土器単体で検出されており、この資料のように破損した多くの土器片とともに検出された事例は認められていない(九州縄文研究会2002)。また、埋設土器は意図的な破損が認められることが多いものの、この完形土器(第19図7)は認められていない。以上のことから、この遺構は一般的な埋設土器とは性格が異なる可能性も考えられる。

(引用・参考文献)

南宮茂生 1997『底面付かぐろの鋸割回』『南九州縄文通信』11

有明町教育委員会 2004『糸浜遺跡・下原遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

上村彰 2000『調査技術からみた縄文早期貝塚文化上面』『南九州縄文通信』14

上田耕 1993『博物館遺物一模型づくりに挑む』『ミュージアム知覧記』3

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『糸浜遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター総合調査報告書(16)

九州縄文研究会 2002『九州の縄文系土器』第12回九州縄文研究会長崎県大会基川博 2002a『南九州縄文系土器1~鹿児島県~』

黒川忠志 2002b『南九州縄文時代早期前段の先駆性について』『第8回研究』41-4

桑波川武志 1998『縄石分文化期における石材利用状況と縄石刀核の分類(1)』『鹿児島考古』32

小鹿子 2007『歩穴とその機能』『鹿児島時代の考古学』5 同成社

佐多修行 1993『鐵劍は保存食卓だった』『ミュージアム知覧』3

芝東次郎 2011『九州における縄石刀石器群の研究』

志布志市教委員会 2010『井手上ノ遺跡・ヒノ島れ連跡・下段遺跡・和田上浦跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

志布志市教育委員会 2012『井手上ノ遺跡(1・2次)』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

志布志市教育委員会 1985『中原遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

新井寛一 1997『縄文時代早期の歩穴の復元』『南九州縄文通信』11

新永亮一 2005『九州の進穴土器の再検討』『南九州縄文通信』16

鹿戸口里 1987『進穴土器のもつ機能的性質について』『鹿児島考古』21

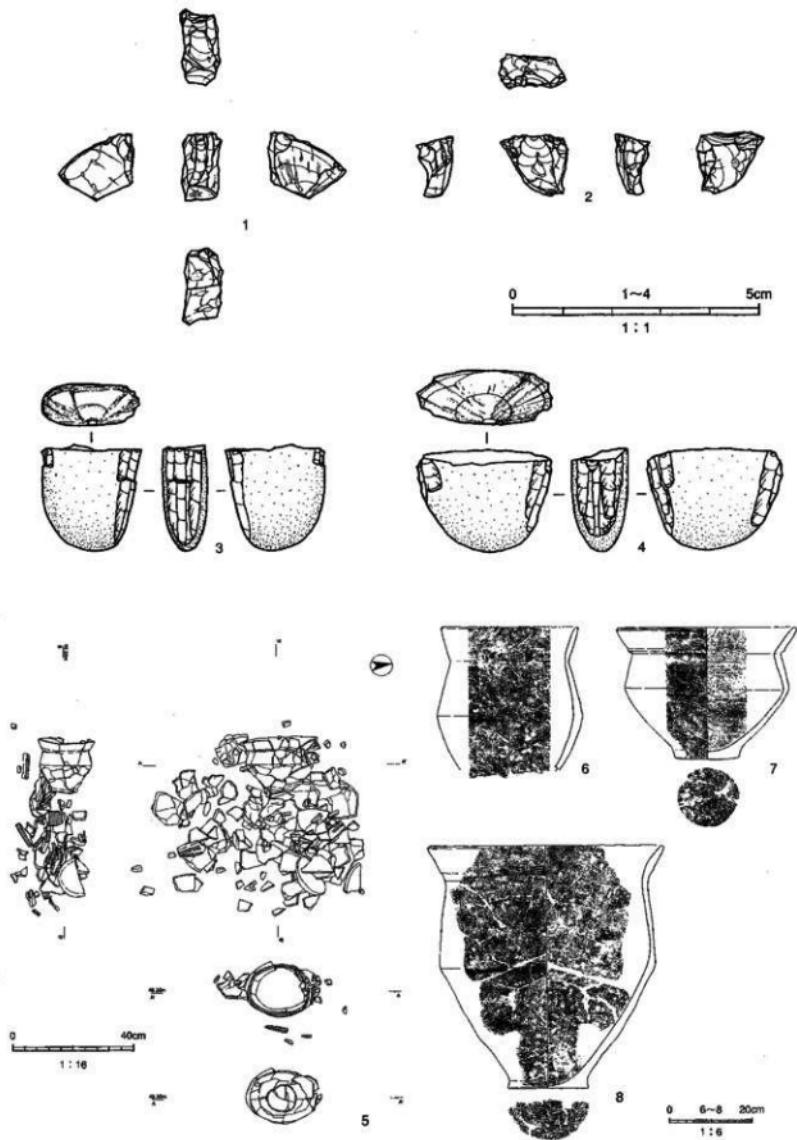
堂込邦人 1997『南九州縄文時代早期土器の外縫接一人佐式と鹿川式の細分』『鹿児島考古』31

永瀬功也 2009『鹿児島県の進穴土器について』『南の風・地域文化論考』 南九州縄文研究会

東郷祐 2006『進穴土器(印穴)の新たな力学的性質“シミ状直線”』『南九州縄文通信』17

前田亮一 1994『南九州の集石遺跡』『南九州縄文通信』8

八木裕一郎 2007『集石遺跡とその機能ー九州島の状況からー』『縄文時代の考古学』5 同成社



第19図 市内出土細石刃核・井手上A遺跡埋設土器

図版



空中写真（国土地理院 1970年撮影）



遺跡遠景（岳野山から）



遺跡近景（南から）



遺跡近景（西から）



作農風景（北から）

図版2



北壁土層断面



東壁土層断面（E-1区付近）



前平式土器（No.8）出土状況（北から）



縄文時代早期石鏃（No.21）出土状況（西から）



集石1号検出状況（西から）



集石1号掘り込み検出状況（南西から）



集石1号掘り込み埋土断面（北東から）

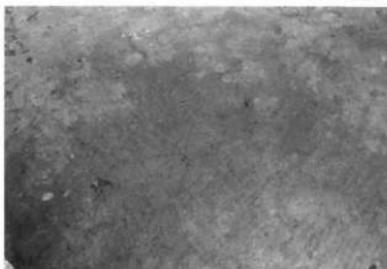


集石1号掘り込み完掘状況（北西から）

図版3



集石 2号検出状況（西から）



土坑 1号検出状況（南から）



土坑 1号半截状況（東から）



連穴土坑 1号検出状況（東から）



連穴土坑 1号抜張後検出状況（北から）



連穴土坑 1号半截状況（東から）



連穴土坑 1号埋土断面（南から）

図版4



連穴土坑1号前平式土器（No.6）出土状況（北から）



連穴土坑1号前平式土器（No.6）出土状況（北東から）



連穴土坑1号完掘状況（南から）

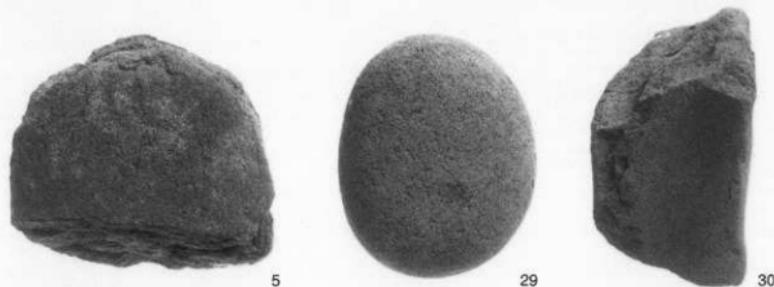
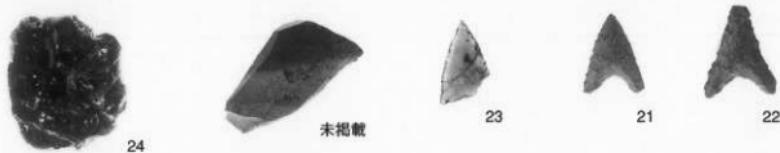


連穴土坑1号完掘状況（南から）

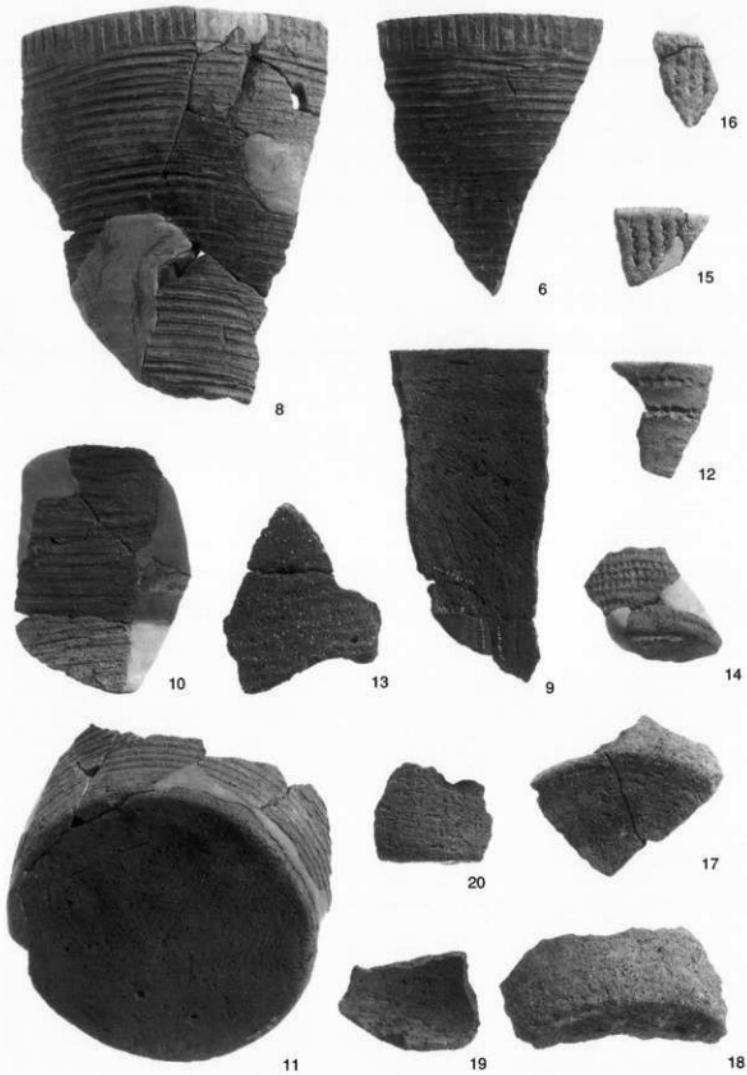


連穴土坑1号断ち割り状況（北東から）

図版5



図版6



報告書抄録

ふりがな	わだうえいせき							
書名	和田上遺跡							
副書名	経営体育会基盤整備事業野井倉下段地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3							
シリーズ名	志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	9							
編著者名	相美伊久雄(編) 板元裕樹							
編集機関	志布志市教育委員会							
所在地	〒899-7192 鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目1番1号 TEL099-472-1111							
発行年月日	2013年2月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わだうえいせき 和田上遺跡	鹿児島県 志布志市 有明町 野井倉 字和田上	462217	新15-500 (旧69-199)	31° 29' 3"	131° 2' 24"	試掘調査 20120116 本調査 20120618~ 20120831	376	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
和田上遺跡	集落	旧石器時代		細石刃核、細石刃				
		縄文時代 (早期)	集石2 連穴土坑1 土坑1	前平式、吉田式、石板式、石 櫛、石核、磨石、瑪瑙				
要約	<p>本遺跡は旧石器時代と縄文時代の複合遺跡である。ほ場軒廊の設計上、高麗火山灰層上面までの調査ではあつたが、縄文時代初期層から旧石器時代の細石刃核と細石刃が出土した。細石刃核は宮崎平野部を中心に分布する唯原型細石刃核である。唯原型細石刃核は、県内において大隅半島側の遺跡で主に認められているものの、出土例はそれほど多くはない、新たな資料を追加することになった。</p> <p>縄文時代においては、早期前期内に位置づけられる七器や石器が出土し、集石遺構が2基、連穴土坑が1基、土坑が1基検出された。土器では前平式、吉田式、石板式が確認できた。石器の石材には、主に三船瀬の高麗石が利用されている。集石や連穴土坑が見つかっていることから、蒙田川東岸の河岸段丘南側に位置する本遺跡が、当時の人々の生活領域として利用されていたことがうかがえる。</p>							

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（9）
経営体育成基盤整備事業 野井倉下段地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書3

和田上遺跡

発行年月 2013年2月

編集・発行 鹿児島県志布志市教育委員会

〒899-7192

鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目1番1号

TEL 099-472-1111 FAX 099-473-1880

印刷所 西文社印刷株式会社 志布志支店

〒899-7103

鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目16番21号

TEL 099-471-1328 FAX 099-471-1329